矢野鶴子さんに聞く　―蘆花夫妻の思い出―

インタビュアー　渡辺　勲
編　集　伊藤　彌彦

解題

ここに掲載するのは、徳富蘇峰・六女で徳冨蘆花の養女となっていた故・矢野鶴子さんへの渡辺勲氏によるインタビュー記録である。鶴子さんは一九〇六（明治三九）年七月一二日生まれ、二〇〇七（平成一九）年九月一〇日に一〇一歳で亡くなった。

インタビューは毎回あらかじめ日時とテーマを設定しておき、地下鉄・表参道駅真上にある鶴子さんの自宅（南青山第一マンション）を渡辺氏が訪問する形で行われた。その回数は初回の一九九九年一〇月一五日から、最終回の二〇〇三年四月三日まで合計二四回におよんだ。（なおその後も渡辺氏は不定期的に年に四、五回鶴子さん訪問をつづけた。最後の訪問はお亡くなりになる二カ月前の二〇〇七年七月二八日であった。）聞き取りのテープは、誤って不燃ごみとして廃棄してしまったそうであるが、幸いにもインタビューの都度テープ起こしした記録が渡辺氏の手元に残っている。

渡辺勳氏は一九九六年秋から、蘆花の旧宅であった世田谷区の都立蘆花恒春園を拠点にして民間サークル〈『みみずのたはこと』懇話会〉を主宰し、今日に及んでおられる。鶴子さんとのインタビュー記録は、このサークルの会報『懇話会レポート』の第27号（二〇〇一・一・一五）から第59号（二〇〇五・七・二五）に掲載された。その後、渡辺勳氏はこの聞き取り資料を活かして『二人の父・蘆花と蘇峰―「みみずのたはごと」と鶴子』（創友社、二〇〇七年）を刊行された。これは聞き書きと蘆花の作品を丹念に照合させて著された労作である。

私は渡辺氏から「『みみずのたはこと』と鶴子」と題された会報連載記事（一～二九回分）をお送り戴いていた。それらを一読した時から、興味津々、徳富蘆花夫妻それに関する貴重な記録であること、それらを生のインタビュー記録として、後世に残すべき貴重な資料であると感じていた。それで今回『同志社談叢』への掲載をお願いしたところ、渡辺氏から快諾を戴くことが出来た。また他に、会報には「鶴子（矢野）さんと語る」と題された十一回分のテープ起こしに基づく記録も掲載されている由で、初回と最終回インタビュー分も今回お送り下さった。なおこの聞き取り記録の扱いに関しては、生前の鶴子さんからすべて渡辺勳氏に一任されているというお話である。

鶴子さんのお話には、重複や時間の前後の飛躍がみられるので、今回の『同志社談叢』掲載に当たっては、「『みみずのたはこと』と鶴子」二九回分の中から、（連載一）から（連載一九）までの記事を底本に用い、スキャナーで読み取とったものに整理を加え、小見出しの一部変更などの編集をおこなった。さらに底本以外の会報記事からも若干の情報を補って稿本を作成し、渡辺勳氏の校閲をえたが、編集の文責は伊藤彌彦にある。

掲載に当たり、インタビュー当時の雰囲気やこぼれ話などを、渡辺勳氏にお電話で伺ったところ、〈兄弟確執のはざま―「子育てゴッコ」に翻弄された鶴子―〉の文章を頂くことができたので、併せて掲載している。これは一〇一歳で亡くなった鶴子さんの最晩年に接した記録ともなっている。グラビアの蘆花・鶴子さん関連の珍しい写真も渡辺勳氏からの提供である。あわせて感謝申し上げたい。（伊藤彌彦）

青山生まれの私

私は、明治三九年七月一二日生まれで、現在九三歳。お陰さまで息災でございます。現在のこの住居（マンション）は、父・徳富蘇峰の居宅があった場所で、「青山草堂」と呼ばれていました。したがって、私はここで生まれ、ここで育ったのです。

父は、明治三二年、それまで住んでいた赤坂・氷川町の勝海舟の屋敷からここに居を移し、「青山草堂」と称して、大正一一年（関東大震災の前年）、家屋を取り壊して「青山会館」を建てるまで、この地が住居でございました。

明治二九年深井英五（後の日銀総裁・枢密顧問官）を連れて、世界一周視察から帰った蘇峰は、西欧の各都市には市民のためのパブリックな会館・ホールがあり、そこでは、集会やデスカッションが自由に行なわれているのに接し、帰国後・その必要性を痛感し、大正一〇年、この青山草堂を提供して青山会館設立を企画し、その趣旨を国民新聞に発表、落成させたのです。当時の東京では先駆的な建物で、その後、震災のあとから日比谷公会堂などなど、公（おおやけ）の会館が建設されるようになったのです。

青山会館の設計は、岡田進一郎氏です。屋敷の玄関は、取り壊して大森（現在の「山王草堂」）の玄関に移

築しました。当時の面影といえば、その玄関ぐらいでしょうか。

その頃の青山は、ちょうど市街地と農村地帯との境目にあたり、有名な「春の小川」の童謡は、この表参道の坂をだらだらと下った辺りの小川（渋谷川）の風景で、この先の「神宮前小学校」の校庭の隅には、記念の碑と当時の小川を偲ぶ水車がまわっています。

蘆花が、明治三三年一〇月から三八年の大晦日まで住んでいた「原宿の家」は、すぐこの先、二百メートルぐらいの近さですが、この場所は港区、蘆花の借りた貸家は渋谷区、と行政区画が異なっているんです。

蘆花が日常会話はもちろん、『みみずのたはこと』でも日記でも、「青山では…」「青山に行った…」「青山の胸ぐらをつかんで…」とあるのは、ここの事、すなわちこの家と父・蘇峰をさしている表現なのです。ご承知のように赤坂とこの青山は近うございますから、乃木将軍は軍馬にまたがって、よく我が家にもお寄りになったと聞いております。もちろん、私の粕谷時代のことですから私は存じませんが。昭和二年九月二三日、蘆花の葬儀もこの青山会館でおこなわれました。

私は明治四一年（数え年・三歳）で、粕谷に貫われて行きました。まだ小さかったので、その当時の記憶は全くございません。大正三年五月二一日、八歳（数え年で小学校二年生に当たる）書生の松岡が粕谷に俥で迎えに来て、ここに帰ってまいりました。私は、ここの青南（せいなん）小学校二年に編入学した後、女子学習院に進学いたしました。

犬や猫の子のように貰われてきた私

私が、粕谷に養女として貰われて来るについては、何時、どういうきっかけで叔父・蘆花が、父・蘇峰に話

をして、父がどんな経緯で承諾したのか、よくわかりません。推察ですが、蘆花は別段、深い意味もなく話をしたところ、父も気軽に応じたのではないでしょうか。

ご存じのように、私はまだ二歳だったので、前後の事情は全くわかりませんが、蘆花が、「子どもが欲しい」という話があった当時、我が家では女の兄弟が六人いました。六番目の私を除いて、五人の姉たちは、

「誰が行くの」

「あんたじゃないの」

「私はいやよ」

「叔父様のお眼鏡に叶うのは、貴女の外にはいませんよ」

と、誰が貰われていくのかと、戦々恐々の毎日でした。

結局、一番小さい私が貰われて行くことになったのは、ちょうど、母が弟（四男・武雄）を身籠っており、ピーピーとまつわりつく、二歳の私に手がかかって大変だったので、多少でも手が省ければという思いがあったのではないでしょうか。いよいよ私が粕谷に行くことが決まったとき、兄・太多雄（長男）が、「もう少し大きくなり、丈夫になってから粕谷にやったらいいのに」と心配し、反対をしたそうです。

「白をなくした淋しさから鶴子をもらいました」と『新春』にありますが、これはフィイクションではなく、その通りだったと思います。つまり、蘆花は犬でも、猫でも、子どもでも何でもよかったんです。それは、「ぜひ、私を」と云うのではなく、「六人いる姉妹の誰か」という話からもおわかりでしょ。

私は、貰われて来たときは、非常にひ弱な女の子でしたが、粕谷に来てからは自然の中で育ち丈夫になりました。おかげで、粕谷時代の六年間、軽い風邪をひいた程度で、病気らしい病気には全然かかりませんでした。

粕谷に「養女」として貰われて来たのに、なぜ、「入籍」しなかったのか……。それは、父・蘇峰が隠し事をするのを嫌い、蘆花に養女にやっても、鶴子は儂(わし)の娘である、儂の子である、という潔癖性と明白性を固持したからなんです。

粕谷では、近所の子どもたちと遊ばせてもらえなかったので、毎日、一人で遊んだり、犬と戯れたりして過ごしました。独り言をいいながら遊んでいたせいか、青山に帰ってからも、独り言を云う事が多く、実は今でも時々、独り言を話すことがあります。

言葉と云えば、同じ年ごろの子どもたちとの接触が殆どなかったせいか、青山に帰って来てからもよく舌が回らず、弟（武雄）のことを「たけお」云えず「チャケオ・チャケオ」と呼んでいましたよ。

私の家庭教師は琴子さん

学齢期になると、父・蘇峰や親族をはじめ、近所の人々も「どこの学校にあげるんですか」「学校、どうするんですか」と、いろいろ心配していたようです。地元の「塚戸小学校」に入学させなかったのは、鼻水を垂らした粗野で、「そうだんべ」という、「だんべえ言葉」を使う子どもたちと一緒にしたくなかったからのようですね。私が聞いたのは、「塚戸に入学させないのは、言葉が悪くなるから」という理由で、その他のことはよくわかりません。

私が学校にあがらず、家庭に居ることについて、近所の人が、「よく役場が放っときますね」といっていました。ですから、法律の規則にしたがって、「自宅学習願い」を役場に提出したりせず、勝手に一存で入学させなかったまでのことでしょうね。

叔父・蘆花って云う人は、そういう人物だったんです。つまり、世の中のしきたりや、社会の規則とかにとらわれたり、束縛されたりしない人だったのです。ただ、私が学校にあがらなかったのは、一年間余り（二年生になった五月二一日に青山に送り帰される）だったので、事無くすみましたが、高学年まで続いたらどうだったでしょうか。

皆さんがよくご存じの、「鶴子に勉強を教える愛子婦人」という写真は、解説と異なり、私は、愛子婦人に勉強を教わったことはありません。私は琴子さんに勉強を習いました。ですから、私の先生は琴子さんなんですよ。

大正三年五月、小学校二年生のとき、この青山に戻って来て、青南（せいなん）小学校に編入し、二、三年生は青南に通い、四、五、六年生は、青山師範付属小学校、中学から女子学習院に通いました。

私の姉妹六人は、皆、女子学習院に行きました。父・蘇峰が校長の下田歌子女史と懇意の中だったので、「娘をお願いします」と云えば、簡単に入れてくださったのでしょうね。

青南小学校では、二年の一学期の成績は、「習字だけが甲、後は全部乙」、二学期からは習字以外の教科も「甲」を貰うようになったんですのよ。愛子叔母にお習字を習った効果があったんですね。

〔渡辺注：寄生木の主人公・小笠原善平は、明治四一年九月三〇日にピストルで自殺。蘆花は、その遺志を継いで、明治四二年一二月「小説・寄生木」を出版しました。明治四三年一月、蘆花は善平への贖罪の心情の故か、姉の俊子・妹の琴子の二人を粕谷に引き取りました。蘆花は、大正二年九月から九州・満州・朝鮮と三ケ月の「死の蔭に」の旅に出ましたが、京城で一行を迎えた蘇峰は、琴子について、「此人はいわば蘆花婦人の高級腰元とでも云うか、或は鶴子の高級保母とでも云うか、使用人でもなければお客さんでもない様な者ら

しく察せられた」と述べていることからも、鶴子さんの言葉が裏付けられると思います。

当時、義務教育の「就学」の規則を調べると、改正「小学校令」の明治四〇年勅令第五二号による変更箇所が、鶴子さんの就学問題に適用されたことになります。

それは、「第三十六条　学齢児童保護者は、就学せしむべき児童を市町村立尋常小学校に入学せしむべし。但し市町村長の認可を受け家庭又は其の他に於て尋常小学校の教科を修めしむることを得。」とあります。

したがって、蘆花が千歳村村長に、鶴子さんの、「家庭教育願い」を提出していれば、合法的だったことになります。そこで、まぼろしの、鶴子さんの「家庭教育願い」を追って、旧千歳村役場の関係箇所・世田谷中央図書館資料室・郷土資料館・東京都公文書館（浜松町）などを、くまなく調べましたが、ついに発見できませんでした。」

粕谷での日常

明治四一年九月二八日、青山の父・蘇峰の家から、叔父・蘆花の養女として、粕谷に貰われて来てから六年八ヵ月を過ごしました。その間、私が叔父の許で受けた感化は、特別の宗教心でもなく、もちろん、幼少の私に文学論もわからず、ただ自然を楽しむことを、無言のうちにひとりでに教えてくれましたネ。

朝の散歩について歩いては、畑の芋の葉にころがる露を、「宝石のようだね」と私に見せ、夕焼けの空を一緒に眺めては、その美しい色、雲の形などからお伽噺のようなことを聞かされました。

こんなことが戦時中、戦後、富士山麓の寒村（山梨県河口湖畔）に疎開したり、焼け野が原の東京に戻って住みついた時も、思いがけないところに、美しさを見い出しては、自分自身を慰めましたノ。これは、私にと

っては、宗教以上の救いでした。

『みみずのたはこと』は、最初からこの題名だったのではなく、叔父・蘆花は『いもの葉の手招き』という題を考えていました。叔父は、里芋の大きい丸い葉に溜まる、銀色の水玉が大好きで畑を歩いていて、よく葉っぱをのぞいたり眺めたりして、楽しんでいました。あの、得も云われぬ銀色につよく心が惹かれていたんでしょうね。最後まで「いもの葉」に拘っていたようですが結局、語呂がわるい、坐りがわるいということで断念したんでしょう。

粕谷では、母屋から書院まで廊下で繋がっていますが、食事が出来ると、「ご飯ですよー」と、叔父・蘆花を書院まで呼びに行くのが私の役目でしたが、そのたびに、「長ーい、長ーい、廊下だなあ」と思ったのを、今でもはっきり覚えています。

恒春園にあるオルガンは、明治時代のもので資料的価値が高いとは聞いております。あのオルガンは、愛子叔母が弾いていたと云われていますが、私の記憶にはそれが全くありません。オルガンはもっぱら蘆花が人差し指一本で弾いており、叔母はいつも琴を爪弾いておりましたね。

『みみずのたはこと』の中には、「鶴子、鶴子」と私のことがしきりに話題になっておりますが、全くといっていいほど記憶にございません。「鶴子がどうした」「鶴子を連れて、どこそこに行った」と描かれておりますが、そのどれもが、記憶の片隅にもないんですのよ。ただ一人、関寛斎さんだけは、はっきり覚えております。小柄でせかせかと小刻みな歩き方で、髷（まげ）を結ったような髪（びん）を束ねておりましたね。

明治四三年、北海道。陸別に関寛斎さんを訪問したことに関しても、アイヌの女の人が口に刺青をしていたことと、陸別の奥に出かけ、テントに泊まったことぐらいしか覚えておりません。ご期待にそえず申し訳ござ

いませんこと。

蘆花の一生は〝ごっこ屋さん〟

蘆花と云う人は、非常に「矛盾した人」であり、「芝居気」の或る人でしたね。さらに、もう一つの特徴は、「ごっこ屋さん」だったということでしょう。蘆花は「ごっこ屋さん」だったと久布白直勝（久布白落実の夫）も云ってます。模倣性が強いというか、何にでも憧れるというか、すぐに騎りやすいとでも申しましょうか。損得の感覚に乏しく、利害関係に疎かったからかもしれませんね。

まず第一は、「美的百姓」と云って、百姓の真似事をした「百姓ごっこ」でしょう。『みずのたはこと』上巻には、「美的百姓」という一章があり、そこでは「彼の百姓は趣味の百姓である」と云って、恒春園での農作業まがいの様子をなかば自慢気に、なかばコミカルに描いてありますね。

この章に限らず、『みみず』の中には、「美的百姓」と云う言葉が随所に出てまいりますが、「真似は本物では無い、彼は終に美的百姓である」と述べているように、結局、「百姓ごっこ」だったんです。叔父・蘆花が農作業姿で鍬を抱えている凛凛しい（？）姿の写真がございますが、私の記憶では叔父が畑仕事や栽培をしたのは、ほんのわずか、月に一、二度ぐらいでしょうか、ほとんどは近所の人や、農作業を頼んだ農家の人が耕していましたの。ただ、畑の草取りなどは、気が向けばたまにはやっておりましたが、愛子叔母は畑仕事はもとより草むしりも、全然したことはありませんでしたね。

トルストイごっこ

蘆花は、明治三〇年に、評伝『トルストイ』を刊行、それが我が国最初のトルストイ伝として一躍有名になり、この書によってトルストイが紹介された結果、多くのトルストイアンが生まれ、さまざまな分野に影響を与えることになったんです。そのこと自体否定するつもりはありませんが本当の紹介者は父・蘇峰なんですよ。

そもそも、評伝『トルストイ』も、叔父・蘆花がトルストイに心酔して執筆したのではないんです。当時、国民新聞社で世界の偉人伝のシリーズ出版を計画し、社員（記者）が分担執筆することになり、たまたま蘆花にトルストイが割り当てられたのが真相なんですの。はじめは蘇峰に命ぜられ、云われるままに愚図愚図書いたものが、予想に反して高い評価を得て、本人もきっとびっくりしたんだと思いますよ。

それに、文学作品ばかりでなく、トルストイの思想、ストイックな生き方、農と共に在る生活、弱者への思いやり、農地解放への共感、キリストへの深い信仰、敬虔な態度などが、共鳴し合ったのかもしれませんね。蘆花は、トルストイに対して、心酔するとか求道とかではなく、自分にないものに憧れるという性癖、言葉は悪いんですが、ファッションに惹かれる傾向があるんですね。

「恒春園の庭先にテーブルを出して食事をとる蘆花一家」というタイトルの、この有名な写真は、『みみずのたはこと』にもその様子が描かれていますが、これは全くトルストイの真似で、叔父の発案ではありません。この写真には、「トルストイごっこ」であることが如実に示されている何よりの証（あかし）ではないでしょうか。

我が家は十人兄弟ですが、誰もがみんな叔父・蘆花が大好き。粕谷に遊びに行くのが楽しみで、待ちきれない思いを抱いていました。その兄弟たちは、蘆花のことを、「叔父さん」「健・叔父さん」などと云わないで、

「トルさん」「トルさん」と呼んでいましたの。

おわかりでしょう、粕谷での生活がトルストイそっくりで、叔父さんが崇拝しているトルストイって云う異人さんは、なるほど、こういう生活をしているのかと、子ども心に強く感じ、西洋に憧れていたんですね。

「ごっこ」は趣味であり、憧れであり楽しみですから、すぐ飽きたり興味が霧散し、消滅するんです。「ごっこ屋さん」の続きは、この次にまたお話いたしましょう…

「子育てごっこ」に貰われてきた私

前回は、「百姓ごっこ」と「トルストイごっこ」でしたが、私が養女として粕谷に貰われてきたのもその一つ、そう、「子育てごっこ」だったんですの。叔父・蘆花は、元来、子ども好きだったんです。しかし、皮肉なことにそういう人にかぎって子宝に恵まれないんですね。

私が叔父に貰われて来てから、十人兄弟の兄・姉たちは青山から粕谷に遊びに来るのを指折り数えて、とても楽しみにしていたんですの。叔父も甥・姪を心待ちにしてソワソワし、来訪すると一手引受で歓待です。夏は井戸で冷やした大きな西瓜や水蜜、秋は邸内の畑で採れた甘藷を山のように蒸かして振舞うなど大騒ぎでしたよ。

それにもまして私たち兄弟の一番の楽しみは、叔父さんが語って聞かせる物語だったんです。イソップ物語はもとより、ペローやグリムの童話などを次から次と聞きましたの。なかでも圧巻だったのは、ヴィクトル・ユーゴの『レ・ミゼラブル』でしたね。身振り手振りを交えての話は、子ども心にもうっとり陶然としましたんですの。

こうして、朝から晩まで幼い客人の世話をしているので、愛子・叔母がだんだん機嫌が悪くなる。三日目位になるとヒステリーを起こし、叔父ばかりでなく、私達にも当り散らしたり、嫌味を云ったりで……。

『みみずのたはこと』の中に、「東京から幼い子ども達が遊びに来て、二、三日たつとホームシックにかかり、目黒の発電所の煙突の煙を見ては悄然としている…」、と書いてありますが、あれはウソ。本当は叔母に意地悪をされて悲しくなり、青山にスゴスゴ帰ったというのが真相なんです。まさか、あの『みみず』に、妻が幼い客人に嫉妬したり、当たり散らしたとは書けませんでしょ。

二歳で粕谷に貰われて来てから、八歳で青山に帰るまで叔父夫婦に育てられ、可愛がられたことについて、それは、今でも感謝しておりますが、しかし、所詮、興味と羨望とによる「子育てごっこ」だったんですの。

現在と違って、明治のあの頃、「産まず女（うまずめ）」の嫁は、縁を切られて実家に返されたり、「子無きは去る」と云われた時代だったでしょ。叔父・蘆花夫妻が引っ越して粕谷に来てみると、田舎には子福者が多く、その上、里子を預かったりして、子どもがウヨウヨしているところから、子どものない寂寥感がいっそう強くなり、渇えるような乾きを覚えるようになったんですね。

養女として貰われて来た経緯については、さいしょにお話申し上げたとおりですが、叔父・蘆花は、私のことを「可愛い、可愛い」と、猫かわいがりで、子どもには贅沢過ぎると思われるほどのものを、惜し気もなく買い与えておりましたの。オモチャのように、「可愛い、可愛い」の感覚のみで、実の子のように、私（鶴子）のことについて心底から悲しみ、痛み、悩み、挫折することがなかったんでしょ。

父・蘇峰の追憶の中にこんな一節がございますの。

「彼（蘆花）は根からの甘ったれで、幼い頃は父母に存分に甘え、大人になって後は自らの愛妻と、唯一人

の兄、私に必要以上に甘えていたのだと思う。気に入らぬことがあれば、時を移さず私に当たり散らす。要するに相手を困らせればそれで自らの腹の虫は収まる訳で、そのためのやり口というのが、時として奇想天外なのである。

ある時の如きは夏の炎天下、養女の鶴子を背負って、粕谷の家から青山の私の家まで、かなりの道のりを汗だくになって歩いて来た。私のやりかたが気に入らぬから、この子を返すと云うのである。

もともと私の方とすれば、どの子にもまして可愛い末娘・鶴子を手放す積もりなど毛頭なかったのを、彼の強っての懇望のまま養女として与えたまでのこと、返して貰えば願ったり叶ったり、一向に困りはしない。困るのは逆に弟の方だということくらい解らぬ筈はない。

ただ、カッとなったら、後先の分別もなく、子供のように決行するだけである。どう間違っても幼い鶴子に当たったりしない所は流石である。」

〔渡辺註：蘆花ばかりでなく、愛子婦人も「子育てごっこ」を認めている。例えば、昭和十四年二月、作家・神崎清との談話の中で、「……鶴子を育てるについて、どんなに骨を折ってみても、生（な）さぬ仲に潜む不自然さを免れることができません。いや意識的にその不自然さを除こうと骨を折ること自体が、すでに不自然の所為だと云えましょう。

私ども夫婦にしてみても、子を愛するというより、子を愛することを愛していたので

ではなかったでしょうか……」と。〕

蘆花夫妻の生活は、所詮「おままごと」

夫婦というのは、家族・生計・家事・育児・眷属について、お互いがそれぞれ支え合い、補い合い、喜怒哀楽をともにするものだと思うんですが、叔父・蘆花夫婦はその点ちょっと違うんですね。

よく、世間では愛子・叔母が、わがままな夫・蘆花に仕えて忍従な生活を送り、彼を支えて終生尽くした良妻であると評価されております。しかし、世間の喧伝とは異なり、実生活ではこの逆で、「おままごと」の夫婦だったんです。どうして、そういう虚像が出来上がってしまったんでしょうかね。

ある時、父・蘇峰が呟くようにポッと云ったことがあります。「健次郎夫妻は、舅姑や小姑と一緒に暮らしてるのではなく、親族の出入り、眷属の付き合いが有るわけでもない。二人だけで気軽だな」と。我が家は、兄弟だけでも十人、賢女の誉れたかい祖母・久子、総庄屋・代官だった祖父・一敬、父の八人兄弟、数知れぬ眷属、そのうえ幾人もの女中・書生など、幾多の人間関係と雑多な人の出入りなど、騒然とした家庭だったんですの。もし、仮定の話であっても、蘆花夫妻にはこういう大家族の生活は、絶対に出来ませんでしたね。

ご存じのように、蘆花・愛子の新婚生活は赤坂・氷川町の勝海舟の屋敷内にあった父・蘇峰の借家の二階の間借りがスタートだったんです。数か月後、叔父夫婦は同じ勝海舟邸内の貸家に引っ越し、独立の世帯を持ちました。愛子・叔母はその年の二月、女子高等師範を卒業し、日本橋の有馬小学校に奉職しておりましたの。余談ですが、その当時、有馬小学校の三年生に谷崎潤一郎と安田靫彦（ゆきひこ）（日本画家・文化勲章受賞）が生徒だったんですのよ。叔母は担任ではなかったようですが…。

叔母は一年足らずで教師を止めましたが、その理由は、叔父が男性教師との仲を嫉妬して辞めさせたということになっていますが、それは真っ赤なうそ。第一は、新婚当初、舅・姑をはじめ徳富家の家族関係に疲れ果

てて、ノイローゼになったこと、それは、本人が語っておりますから事実でしょう。第二は、生来、叔母は虚弱体質で体が弱かったこと。第三は、性格的にいって教職が向いてなかったんですね。で、結局、自分から身を引き、退職したのが真相なんですの。

その頃、勝海舟邸を訪れた、さる政府高官に向かって勝翁が、「徳富の弟もなかなかやる……焼き餅喧嘩をね。茶碗や急須が飛んでくるくらいならまだしも、どうかすると、鍋やお鉢まで飛んで来るらしい。派手なもんですよ」と語り、呵呵大笑したと云われておりますの。

叔父・蘆花は感情の振幅が大きく、激すると盛り上がる感情の固まりをおさえきれず、すさまじい癇癪を起こすことがしばしばでしたが、叔父夫婦は喧嘩を日常茶飯事として、むしろ、これを楽しんでいたんです。二人の喧嘩については、後ほど、また、ゆっくりお話申しあげましょう。

愛子・叔母の体が弱かったことは、周知の事実で、しばしば入院しておりますね。大正四年には、六月から九月まで三ヵ月もの長期入院がありましたように、粕谷でも私の記憶では、体の弱い人で毎日のように書院で昼寝をしておりましたの。野良仕事はむろんのこと、家事・育児も何人もいた女中まかせで、全然やりませんでした。たま〜に草むしりをするのが、むしろ珍しかったですね。私の養育についても、「三十過ぎると子守は疲れる」と、こぼしていました。

お料理は、女中任せのせいばかりでなく、本人自身も好きではなかったんですね。料理が下手だったのは隠れもない事実。蘆花邸で食事をご馳走になった人々には、「蘆花はよくあんな不味い料理を我慢して食べている」と云われていたくらい有名だったたようですよ。逸子さん（蘇峰の長女・鶴子の姉）たちが、粕谷に行くたびに、「料理は全く下手で、まずくて食べられない」と云っておりましたね。例えば、出来あがったカレー

に、大きなうどん粉が固まったまま入っていて、食べられないことがあったといいます。子どもは正直ですからね。

蘆花は非常に「矛盾した人」

中野好夫さんは、名著『蘆花徳冨健次郎』の中でたびたび指摘されているように叔父・蘆花はひじょうに「矛盾した人」でしたね。それは正論ですよ。

例えば、「菜食主義」と云って魚肉を食べないと宣言してもすぐに止めたり、粕谷の転居に際しては、「農とともに在る生活」と称して百姓の心に寄り添う、を信条に「美的百姓」を宣言、「百姓生活」を始めても束の間で止め、結局は知り合いや近所の農家に耕作を依頼することになってしまったでしょ。今おもえば、「農は予の最も好むところ」なんて云ってますが、「農」と云うより樹木や植木、草花など「植物」が好きだったんでしょう。

粕谷への移住では、本籍までここに移して千歳村の村民の一人として百姓の生活を賛美する一方、みすぼらしく汚い着物姿の子供たちと一緒では鶴子が不潔になるとか、子供が使う「だんべえ」言葉がうつるからと云って、私を地元の塚戸小学校に入学させなかったことなどが、その端的な表れですよね。

粕谷に転居以来、トルストイの「理想主義」を掲げても、実生活ではその逆で乖離が大きかったんですの。叔父は私達を連れてよく東京に出掛けましたが、その際の食事は、日比谷の「松本楼」か「精養軒」の高級料理しか食べませんでした。そば屋とか普通の食堂に入ったことは、全く有りませんでしたね。蘆花は、粕谷の田舎住まいで質素な生活をしていたように思われていますが、本当は「贅沢な人」で、「貴族趣味」の人でし

たよ。

叔父・蘆花はキリスト教徒で、『みみずのたはこと』をはじめ、その著書の中にはイエスや聖書に関する記述が見られます。

大正九月二月から一一月三〇日までの九州・満州・朝鮮・山陰への長旅、いわゆる「死の蔭に」の旅では、クリスチャンでありながら、伊勢神宮で御神楽を奉納して、それはそれは丁寧にお参りをしましたの。伊勢神宮ばかりではなく、出雲大社では、御神楽こそあげなかったものの、多額の賽銭を奉納して恭しくお参りをしたんです。……驚きましたね。

蘆花は芝居気のつよい人

叔父・蘆花は、ひじょうに「芝居ッ気」のつよい人でした。本人はいたって真面目でひたすらに打ち込み、没頭しているのかもしれませんが、傍からみると、芝居ッ気たっぷりでしたね。

今でも、私が一番つよい印象を持っているのは、「明治天皇御大葬」の日の出来事ですの。明治四五年、明治天皇の御大葬の日、恒春園の母屋に祭壇を作り、時計を持ち、天皇の霊柩車が宮城を出る午後八時、時刻に合わせて皇居を遥拝したことなどは、それを端的に物語っております。その様子は『みみずのたはこと』下巻に出てございますでしょ。その『みみず』では、

「柱時計の短針が八時を指すか指さぬに、ドーン！待ち設けても今更人の心魂を驚かす大砲の音が、家族をも我らの全身をも揺り動かして響いた。

（略）

主人は東に向かい一拝して香を焚き、再拝して退いた。妻がつづいて再拝して香を焚き、三拝して退いた。七歳の鶴子も焼香した。…」（下巻・89頁「御大葬の夜」から）

こうなっておりますが、柱時計が鳴ったのではなく、蘆花が左手に懐中時計を持ち、その針が八時を指したんです。芝居ッ気たっぷりのセレモニーを終え、三人で屋敷の角の火の見櫓の所に行って見ると、東京の方がボーッと明るく見えたのが、今でも目に浮びますの。

小柄な体躯で、関取のように髭を結った関寛斎

この度、関寛斎さんを顕彰する「白里忌」が行なわれることは、陸別の「関寛斎顕彰会」事務局長・斎藤省三さんから、ご連絡をいただきました。寛斎さんとは所縁（ゆかり）がありますが、この年では北海道はとても無理。で、「それなら、記念誌への寄稿を…」と、依頼されましたが、それもままならないのでこの人（身のまわりの世話をされている宇田ハル子さん）に、丁重にお断わりの返事を代筆してもらい、投函いたしました。

私が叔父・蘆花の養女として粕谷で過ごした五年八ヵ月の間、いろいろな人々が出入りいたしましたが、今でもはっきり覚えていて、鮮明に記憶に残っているのは、関寛斎さんと、浅原丈平（蘆花会長・浅原健氏の父）の二人だけですね。

『みみずのたはこと』では、木下尚江、綱島梁川をはじめ、名作「梅一輪」のお馨さんこと、石倉芳子さん、「次郎桜」の篠田次朗少年など、たくさんの人々が描かれておりますが、どなたも存じません。ただ、何ゆえか関寛斎さんだけは、あざやかなんですの。

寛斎さんは、どちらかと云えば背は低うございましたね。小柄なからだで小走りのように小刻みにサッサと

した歩き方でした。粕谷にお見えになった時は、とっくに七十を超したお年だったと思いますが、血色が良く、年の割に若く見えたことを覚えておりますの。おつむの髪（びん）は伸ばし、関取のように頭の上に髷（まげ）を結っておりました。そういう風貌が子ども心にきっと印象深かったのでしょうね。

明治四三年、叔父・蘆花と訪問したときは「りくんべつ」と云っておりましたが、今では「りくべつ」と、漢字の訓読みどおりの言い方ですね。夜、陸別に着いて、寛斎さんを尋ねると人々がテントで焚火をしていましたね。テントを見たのも、テントで暮らしているのも初めてなので、きっと眼を見張ったのかもしれません。アイヌの女性に初めて会ったのも陸別でした。口のまわりに刺青（いれずみ）をしているのでビックリしたのを今でも忘れません。四歳の子どもですから、刺青なんて全然存じませんでしょ。驚きでギョとしました。

陸別の帰路、札幌に寄りました。役所のような建物でお茶などをご馳走になったそこの戸棚の大きな塚の中にアルコール漬けになった女の子の手首が入っておりました。熊に食べられた胃袋から取り出したもので、この子はメリンスの着物を着ていたんですね。手首に纏わりついていたメリンスの柄が、今でも焼き付いておりますの。

逗子を世に紹介したのは父・蘇峰

文学散歩で逗子においでになったそうですが、「不如帰（ほととぎす）の逗子」といわれるぐらい有名で、叔父・蘆花が逗子を世に広めたように取り沙汰されておりますが、実は逗子を広く紹介したのは、父・蘇峰でございます。

当時、知識人とか上流階級の避暑や別荘は大磯海岸だったんですの。まだ、一寒村にすぎなかった逗子の海岸ですが、田越川の川口のあたりが故郷の水俣に非常によく似ているところから、親孝行の父が両親のために

家を建て、当時の様子を『国民新聞』に「逗子だより」として連載。その記事が評判になり、一躍、有名になったのです。あの「蘆花公園」も家の地所なんですが、市に寄付をすれば良かったのですが…

いつもと違って、前回は「北海道・陸別と関寛斎」さんや、逗子にまつわる話題で、脇道にそれましたね。では、また本題にもどりましょう。

乃木大将の殉死

そう、前々回は「明治天皇崩御」のお話でしたね。叔父・蘆花は「芝居気の強い人」だったという端的な事例として、御大葬の夜の粕谷でのセレモニーをお誘いたしましたでしょ。ところが、そのあとがまた大変、まあ、お聞きくださいまし…

明治天皇は、明治四十五年七月三十日に崩御あそばされたのは、貴方もご承知のとおりですが、御大喪（ごたいそう）は、約四十日後の九月十三日で御座いました。その晩、母屋の六畳に祭壇をしつらえて、霊柩車が宮城をお出ましになった午後八時、ドオーンという号砲を合図に、香を焚き三拝した様子はお話いたしましたね。

その翌々日、九月十五日は蘆花にとっても日本国民にとっても、一大事、それこそ衝撃的な出来事が起こりましたの。『みみずのたはこと』には、こう書かれておりますでしょ。

「九月十五日、御大葬の記事を見るべく新聞を開くと忽ち初号活字が目を射た。乃木大将夫妻の自殺　余は息を飲んで、目を数行の記事に走らした。『尤もだ、無理もない、尤もだ』

斯く呟きつつ、余は新聞を顔に打覆うた（『みみずのたはこと』下巻94頁）」。

渡辺さんもご承知のとおり、霊柩車がお車寄せを離れられた瞬間、号砲の合図で辞世の歌を詠みご夫妻が自刃なさいました。

それについては、翌年・大正二年に発行された、文部省著作の高等小学校第三学年の国語教科書には、こう書かれておりますの。

「…此の時学習院長陸軍大将伯爵乃木希典は、

〈うつし世を神去りましし大君のみあとしたひて我はゆくなり〉

の辞世を残し、赤坂新坂町の自邸にて割腹して果てぬ。夫人静子亦夫に後れじと歌を留めて自刃に伏せり。湿り勝なりし秋の夜のやうに白み行く頃、此の悲しき悲報は満都の市民を驚かしぬ。

電音は直ちに全国に伝はり、全世界に拡がりぬ。

先帝追慕の涙にかき暮れし六千万の国民は、更に又大将夫妻を悼むの悲嘆に沈めり。

世界各国の新聞紙は先帝の盛徳大業を称へて大喪儀の森厳なりし記事を掲ぐると共に大将夫妻の壮絶なる殉死を哀悼し是実に日本古武士の精神なり……」。

まあ、枕言葉が長くなって御免なさいまし。この日、叔父・蘆花は書院の奥の廊下におりました。多分、読書をしていたんでしょう。「号外が出ました」といって、女中が叔父のところに持ってきました。この時は、例の小説『寄生木』の小笠原善平姉妹、俊子・琴子さんを引き取っていたので、ご両人のどちらかかも知れませんね。

新聞を手に取るやいなや、猛り狂ったように母屋に駆け込んで来たんです。蘆花は愛子叔母と私の前に座り、筋肉が硬直するようにワナワナと体を震わせ、激情が迸(ほとばし)りるような、言葉にならぬようなことを大声で喚(わめ)いて

おりました。

そのうち、乃木静子夫人に話がおよび、「貞女である」「日本夫人の鑑だ」「亭主の後を追う女性こそ烈女と云うべき」「己れを滅しても夫に尽くし、天皇に殉ずのが誠の婦道なり」と、興奮のあまり、最大の賛辞をもって褒め讃えましました。

幼い私は叔父の興奮と気迫に圧倒されて、まるで錯乱の渦の中に漂うような有様でした。こうした叔父・蘆花の静子婦人称賛を聞いていた愛子叔母は、突然「私だって、貴方が死んだら後を追って自害します」と、昂然と叔父に言い放ったんです。あまりにも自信に満ちた明瞭な言葉だったので、私は思わず叔母の顔をみつめましたの。異状な雰囲気、特殊なシチェーションで、しかも、親子三人だけだったのでその言葉は、現在でも明確に覚えております。

しかし、この「私も後を追います」という言葉は、最愛の父・蘇峰はもちろん誰にも話さず語らず、私の胸の中だけにソット閉まっておきました。昭和二年、伊香保で蘆花が病没した時、愛子叔母はその言葉どおり「後追い心中」するとばかり思い、何時死ぬか何時死ぬかと、しばらくの間その事を考え続けておりました。しかし、結局は嫉妬心による出任せの言葉だったことが後になって判然りましたの。

異常に嫉妬深い叔母・愛子

前回、叔父・蘆花が「乃木大将夫妻の自刃」を知って、強い衝撃を受け、動転し錯乱した様子と、愛子・叔母が蘆花に向かって、「貴方は、〈静子夫人が夫に後れじと、歌を留めて自刃に伏せたのは貞女の鑑〉と仰有るが、私だって貴方が冥途に旅立てば、夫人と同じように後を追います」と昂然と言い放ったこと、それは、

〈売り言葉に買い言葉〉と云うより、ヒステリーであり、嫉妬の焼餅だったと申し上げましたね。

さて貴方もご存じのように、世間一般では「蘆花はすごいヤキモチやきで、愛子夫人に対する嫉妬心は、異状を通り越して病的ですらあった」と云われております。まさに通説であり、蘆花の自画像にもなっておりますでしょ。それは、常識はずれの言動、理解に苦しむような奇怪な行動などによって増幅され、さらに、自伝小説『思出の記』や小説『富士』をはじめとした著作などによって裏付けされておりますね。

しかし、「嫉妬の蘆花」は、実を云うとこれは作られた虚像なんです。幾つかのエピソードが堆積されてデフォルメされたり、フィクションにリアリティーが凝縮されて、いつの間にか偶像ができたんです。虚実入り交じったと云うより、虚像の幻惑でしょうね。

御免なさいませ。話を戻しましょう。

最初にお断わりいたしますが、これは、身贔屓で申しあげるのではなく、また、愛子叔母が憎いとか恨み辛みがあって悪し様にというわけではないので、誤解なさらなでくださいまし。乃木大将静子夫人の例からもおわかりのように、愛子叔母は非常に嫉妬深い人だったんです。このことは、「嫉妬狂いの蘆花」と云うレッテルの陰に隠れて全く不問にされ、噂にも話題にもならなかったんですから不思議ですね。

（旅行先の朝鮮で）名所旧跡の見物の夜、父・蘇峰が料亭で私たち一行を歓待してくれました。ご酒は頂きませんが、料亭なので芸妓（キーセン）がその席に見え、何くれと世話をやいてくれました。その時芸者が叔父に凭（もた）れ掛るようなしぐさをしたと云って、愛子叔母が猛烈に嫉妬を焼いて、翌日、はげしい夫婦喧嘩をしましたの。「宴席で商売女の出来事なのに」と、つくづく思いました。今思い出してもそりゃ、ものすごい大喧嘩でした。

粕谷に引き取った『寄生木』の小笠原善平の姉・俊と妹・琴の二人についても、蘆花との間を嫉妬し、トラ

ブルがいろいろございました。この二人は、愛子夫人のお通夜にも葬式にも、とうとう見えませんでした。

嫁いびりと捕られては心外なんですが、徳富の一族で「嫉妬深い愛子叔母」は、定説なんですの。父・蘇峰も四年前に出版された『弟 徳富蘆花』で、「兎に角彼等夫婦は或る意味から云えば、焼餅マニヤに罹って居た様だ。それは蘆花弟のみならず、蘆花夫人も亦同様であった…」（一六七頁）と述べておりますでしょ。続いて、「嘗て予の長女が蘆花邸に赴き、何かの場合に蘆花弟の傘の下に入って共に歩いた処、蘆花夫人は、『立派な御夫婦である』などといって、盛んに厭味を言ったといふ事である。そこで、『鶴子なども養女として九歳の時に返された事が寧ろ仕合せである。若し年頃ともなったら困った事が出来たかも知れぬ』と、彼女の姉達は互ひに相語って居た…」と回想しておりますね。

晶子の歌集を焼き尽す嫉妬の炎

具体的に申し上げましょう。明治時代、一世を風靡した二人の女流作家と云えば、一葉と晶子で御座いますね。叔父は女性に優しかったんでしょうか、彼女たちを二人とも好きだったんです。与謝野晶子は明治三十四年、処女詩集としては異例の世評を得た『みだれ髪』を出し、以後、十年間は相次いで歌集を出版しておりますね。

明治四十四、五年かもしれません。晶子から出版直後、歌集を送ってまいりましたの。何気ない軽い気持ちでしょうか、それとも、妹のような晶子への淡い恋慕があったんでしょうか。晶子からの封筒を切り取って、歌集の表紙の裏に貼りましたの。それを見付けた愛子叔母が、「何です、これは」って云うと、ピーと表紙を破り捨てたんです。すごい剣幕でしたね。

樋口一葉は明治五年生まれですから、蘆花の四つ違いの妹っていうかんじでしょうか。早くから文学をこころざし、明治二十八年（蘆花二八歳、一葉二三歳）に『にごりえ』『たけくらべ』を発表するや、「いま紫、いま式部」と鴎外、樗牛などに絶賛されましたが、翌年、二十四歳で病没いたしましたね。

その彼女を悼む心情が沸々としていたのでしょう。愛子叔母には告げずに、しばしば築地・本願寺の墓地にお参りに訪れておりました。それについては、明治四十二年四月一日の夜半、本願寺の本堂広縁に手枕をして横になり、夜を明したと『みみずのたはこと』（下巻）に描かれております。

告白小説『黒い眼と茶色の目』の初恋の人・山本久栄のことも、何時までも何時までもこだわり根に持って、それは、死ぬまで延々と続きましたね。「久栄は、芸者の娘だ」と、口汚く軽蔑していた言葉が、今でも耳朶に残っております。

石川三四郎さんの奥さんだか娘さんだか知りませんが、望月百合子との凄い大喧嘩をしたのも、嫉妬が原因でしたよ。ひがみっぽい人、淋しい人だったんですね。

巷間、蘆花叔父の愛子叔母に対する愛情は、独占的で強烈だったゆえに、その嫉妬は、鉄をも溶かす灼熱の炎だったと云われておりますでしょ。たしかに言い得て妙で文学的ですが、しかし、その色彩の幻惑に魅せられてデッサンの本質を見落としているかもしれません。

数年前、渡辺さんが千明仁泉亭のご主人、千明三右衛門さんから、

「蘆花先生は、ご夫婦仲がおよろしくて、それはそれは、仲睦まじいお二人でしたね。現在と違って、明治のあの時代に、伊香保の町中を手を組んで歩くんですからね。『何事か…』と、温泉街のみなさん、眼を丸くして驚いたもんでしたよ」とお聞きになったそうですが、その通りでいかにも叔父らしい仕ぐさでございまし

よ。

新し物好き、蓄音機購入。義大夫好き、壺坂霊験記

明治四十四年でございましょうか。「新し物好き」の叔父・蘆花は、当時まだ非常に珍しかった「蓄音機」を購入いたしました。それは、新築間もない奥の書院（註・秋水書院）の次の間に置いてございました。

『みみずのたはこと』に、「蓄音機を興行した」と書いてございます。四回に分けて村の方々を招いてお聞かせしたようでございますが、大きなお皿に鯛のアラが山程のっていたことを覚えて居ります。蘆花の文章に、「この辺の人は、新しい魚が食べられないから、雪のように白いご飯と、ピチピチした鯛の刺身と、鯛の煮付けをおなかいっぱい食べさせてあげたい」と云うようなことが出ておりますね。後年、女学生になってから、『みみずのたはこと』を読んで、「ああ、あの「蓄音機」のお呼ばれの日、お丼に山のように盛られていた鯛のアラ煮が……」と、遠いあの日の光景が、鮮やかに目の前に広がってまいりましたの。

叔父・蘆花は「義大夫」が大好きで、特に「呂昇」がご贔屓。劇場にもよく通ったばかりでなく、呂昇の「壷坂霊験記」のレコードを買い、蓄音機を廻して、擦り切れるまで聞いておりました。

私も幼いときから、そばで一緒に聞かされていたため、もう五歳ごろには「沢一」と女房「お里」の物語も、サワリの科白もよく知っておりました。七歳で青山に戻ったとき、何気なくフト「壺坂」を口吟（くちずさ）んだところ、父・蘇峰に、「うん、なかなか巧いもんだ」「鶴子の趣味は、年を経た人のようだね」と誉められて、くすぐったいような妙な気分を感じたことがありましたの。

義大夫好きの叔父・蘆花が、特にこの「壺坂霊験記」を好んだのは、「呂昇」が贔屓だったこと、今の演歌

と同じように当時、義大夫の名曲だったことなどが挙げられますでしょうが、最大の原因は、主人公「お里」の人物像だったことは間違いございません。叔父・蘆花の理想的・女性像は、「お里」のような貞節な女性だったんです。そして、生涯の伴侶として生活と苦楽を共にするのは、「才媛」とか「才女」ではなく、「明るく」「物分かりがいい」「物にこだわらない」「相手にからまない」女性、つまり、いっぽうでは「貞女」を望みながら、他方では「普通の女性」を望んでいたんですね。

蘆花忌

お久しう御座いますが、息災でいらっしゃいますか。この夏は一入（ひとしお）の暑さでしたが、ここへきて急に寒気がやってまいりまして、ストーブをお灯けいたしましょうか？　このマンションは、各部屋ごとでなく、全館一斉の集中暖房なものですから…御免なさいまし、一一月一日からでないと入りませんの。

今年の「蘆花の命日」は、あいにく、肌寒い日で御座いましたね。私はこの通りの体なので、例年のようにこの人（身のまわりの世話をされている宇田ハル子さん）に名代で行ってもらいました。当日、恒春園で宇田さんは渡辺〔勲〕さんや蘇峰会の岩崎〔達郎〕さんにお会いになったそうですね。どうもご苦労さまで御座いました。

今年は例年になく涼しく、むしろ寒いくらいでしたね。この人ばかりでなく、徳富家からは、孫が三人参加いたしましたが、三人とも寒い寒いと云っておりました。秋霖のように肌寒い日だったせいか、参加者も例年に比べてかなり少なかったと聞いておりますの。

天気が良ければ、我が家の孫たちも、もっと大勢出掛けたと思いますが…。私、八十歳までは叔父の命日に

お参りに伺いましたが、それ以来、もう十五年も外へは出ませんので、すっかりご無沙汰で…御免なさいまし…。

以前もお話し申し上げたように、叔父・蘆花の命日、蘆花忌は八十歳ぐらいまでは毎年、お墓参りに伺っていましたが、「蘆花会」の人たちにお会いするのが嫌なので、朝早くか、夕方遅くお参りに伺っておりました。万やむを得ないときは、その前日か翌日に伺っておりました。

叔母の愛子忌の二月二十日も、八十歳ぐらいまでは、毎年墓参しておりました。開門を待って、事務所の方に名刺をお渡ししてきたことがあります。又、雪が降った日の朝なのに、きれいに雪掻きがしてあったこともありました。足が悪くて一人で伺えなくなってからは、この人（宇田さん）が、私の名代で墓参しております。

多摩墓地は『蘇峰墓前祭』

父・蘇峰は昭和三二年一一月二日に九五歳で亡くなりました。その父を偲んで、毎年、一一月二日の「蘇峰忌」には多くの方々が墓参してくださいました。しかし、年とともに参会者がご高齢になり、この日は霜が降りるなど気候が冷込みますので、一ヵ月早めて十月初旬に「墓前祭」を挙行することに決め、今年は、一〇月六日（土）に実施いたしました。

希望者は、新宿西口から貸切バスで墓地に向かい、墓前にお花をお供えして冥福を祈ります。もちろん私は参列出来ませんので、名代としてこの人に参加してもらい、家で静かに亡き父を偲んでおります。つい先日、末弟・武雄の連れ合いがなくりましたので、父・蘇峰の息子、息女はたった私一人になってしまい、淋しくなりました。

「蘆花忌」は、天候不順のためにご参加が少なう御座いましたが、「蘇峰・墓前祭」の方は御出でくださる方々が年とともにご高齢になり、その上、遠方からご参加の方々に、ますますご不便をお掛けするのは心苦うご座いますので、そろそろ終了したいと思っておりますの。

兄蘇峰と弟蘆花、共通する皇室中心主義

父・蘇峰と叔父・蘆花は血を分けた兄弟ですから、非常によく似たところがある一方で、相反する面も多う御座いましたね。

皆様よくご存じのように、父・蘇峰は「国粋主義者」と云われ、「国家主義者」と罵られ結局、終戦後、「戦犯」（戦争犯罪人）に指名されました。そのため、すべての公職役職から身を引き、文化勲章（昭和一八年受賞）も返上し、閉門蟄居、ひたすら謹慎いたしました。父は、単なる思いつきや扇動、あるいは激情にかられての発言ではなく、明確なポリシーに基づいての表現で、その思想は「皇室中心主義」だったのです。

それに対して叔父・蘆花は、敬虔なるクリスチャンを標榜し、人道主義を旗幟に掲げておりますが、その根底に淀んでいるものは、父と同じ「皇室中心主義」だったんです。前にもお話申しあげましたように、私の記憶では、時々、聖書をひもどくことはありましたが、叔父が粕谷の家で祈祷したこともなければ、ましてや教会に出掛けたことは一度もありません。賛美歌などはなおさらですの。

例えば、有名な「死の蔭に」の旅では、伊勢神宮でも出雲大社でも昇殿し、それはそれは盛大な「御神楽」を奉納したんです。蘆花は「クリスチャン」ですのよ。薩摩・鹿児島での事、西郷隆盛の墓地ではとうとう墓石を抱き抱えてオーオー号泣するのですの。父も叔父も一番尊敬していたのは、キリストでもトルストイでも

なく、明治天皇に間違い御座いません。

この話を文学散歩の野田宇太郎さんに申し上げましたら、「やっぱりそうだったんですね」って、膝を叩いて納得なさいましたね。

この冬は何か、格別に寒いようでございますネ。意気地が無くなったのか、それとも、年令のせいなんでしょうか…としと云えば、私は今年、九十六歳なんですの。繰り上げれば百歳、まあ、何と長生きをしてしまったんでしょう。父・蘇峰は昭和三二年、九十五歳で亡くなりましたが、私、父を凌いで、まあ百歳に手が届くなんて……どう致しましょう。

貴方とは、叔父・蘆花と粕谷時代の思い出、「『みみずのたはこと』の世界」を語ることになっているのに、話が分離したり、脱線したり、膨らんだりが多ございましたネ。

話を本題に戻すことに致しましょう。

以前にもお話申し上げたように、『みみずのたはこと』に書かれてありますのは、殆ど私居りました間のことで御座いますから、幾分でも参考になればと存じますが、何しろ九十年も昔のことで御座いましょ。記憶と云ってもねえ…。

貴方はもちろんのこと、誰でも幼いときの出来事は、断片的にしかインプットされておりませんでしょ。それに、後ほどお話申しあげますが、青山に返されてからは、つとめて千歳のことは忘れよう忘れようと致しましたので、記憶がなおさら少ないのではないかと思います。と云うわけで、私の蘆花実妻思い出は、大変少なう御座いますノ。

家の佇まい

叔父・蘆花は、明治四〇年二月、粕谷の世話役・吉岡さんから一反五畝の家付き地所を二百五十円で買ったんだそうですが、もちろん、私が貰われて来る前のことなので存じようが御座いません。母屋だけでは全くの手狭なので、書院をつぎつぎに買い増したのですが、最初の表書院は、現在、九月の「蘆花忌」の会場に使用される「梅花書屋」で、次に奥書院の「秋水書院」を増築いたしました。

「梅花書屋」は八畳・六畳の二間に廊下の古家を、八幡山の農家から明治四二年四月に移転したものですが、私はまだ三歳の幼児だったので、全然わかりません。「秋水書院」は、十畳二間に納戸・廊下・寝室の二五坪の家で烏山の古家を移築したものだそうです。叔父は南西のまわり縁になっておりますかどに、今も置かれている大きな机で物を書いたり読んだりしておりました。

その大机は小説『富士』を書くさいに、親戚の系図からその知り合いなどに至るまで膨大な資料を広げて著述したため、あの広さでも狭いくらいだったと聞いております。奥書院（秋水書院）を増築しました頃は、蘆花も比較的悩みも少なかったのか、親戚などもよく行き来しておりました。

ある一日、奥書院の披露と云うことで、逗子に隠居しておりました私の祖父母、両親、熊本から上京してきた伯父夫婦なども呼びまして、楽しく遊んだことも御座いました。

樹木の佇まい

粕谷に貰われて来た私が、物心ついた頃は、庭には大きな木は御座いませんでした。母屋の北側に、風避けのために植えられた樫の木が五・六本あった程度で御座います。鬱蒼とした現在の恒春園の自然林からは、全

く想像もつかないほどの殺風景だったんですの。

蘆花は花の咲く木が好きで御座いましたから、その後ずうっとまわりにあらゆる木を植え、いつの間にかこんな自然林の風景になってしまったのですの。いつでしたか、父・蘇峰が、「山林を開いて畑にすることは聞いているが畑を山林にしたのは、田中光顕さんと健次郎さんばかりだろう」と申して大笑いしたことも御座いました。

春は文字通り「萌黄色（もえぎ）」に芽吹く滴（したた）るような新緑、竹林の筍、炎暑の日の夕べの涼風、錦織り成す紅葉など、恒春園の四季の佇まいは、自然林の美学と讃えても決して言い過ぎではありませんね。

特に、恒春園の「紅葉」は、今ではアマチュアカメラマンの絶好の被写体として、都内の名所になり、各種のカレンダーにも盛んに掲載されているそうじゃ御座いませんか。母屋や書院にそった所は広い芝生で御座いました。叔父は、百姓の真似ごとをして居りましたから、芝生でない所で麦打ちをしたり、小豆や胡麻を取って、その始末をしたり、暮れにはそこで、お餅つきもいたしました。

奥の書院の西南に花壇と畑が御座いました。今の青山の第一園芸（註・青山学院正門前）のもう少し渋谷に寄った所に「興農園」と云う園芸店が御座いまして、そこの目録を見ては珍しい種だの苗だのを取り寄せて居りました。自分の作り方が悪いんでしょうに、見本のようにきれいな花が咲かないのを、「商人の不徳だ」「こりや詐欺だ」とか云って憤慨していましたね。

畑には麦、サツマイモ、馬鈴薯、トウモロコシなど、自分たちの生活にいくぶんは足しになったのでしょうが、全然足しにならないような、ハッカ、その頃はまだ珍しいアスパラガスなど、作っても硬くて食べられないようなものも植えて居りました。

叔父は果物が好きで御座いましたので、放し飼いにしていた鶏につつかれないように、水蜜桃の木のまわりに、あらい金網を張っておりましたね。今、お墓がある所は、雑木林で、春夏秋冬、野の花が咲いておりました。蘆花の通夜の時に、そこで採れたきのこで、初茸ご飯を炊いたことを覚えておりますの。

春・夏の思い出

四季を通じて思い出を追ってみますと、春ならば農作業に忙しいのでしょうが、どうも私は蘆花が美的百姓をしていると云う記憶よりも、やっぱり奥で書き物をしていた横顔が一番印象に残っております。

蘆花は夏が好きで御座いました。書簡集に、「連日の夏らしき暑さにて心地よきことに御座候」と書いて御座います。中野先生のご本にも出ておりますが、蜩が鳴いて、まだ陽が高い頃に、芝生に椅子やテーブルを出しまして、やぶ蚊にさされながら食事をしたことも御座いました。ちょうど夏、「順礼紀行」の旅でトルストイのお宅を訪問しました時に、外で食事をしたので、そんなことも印象にあって雰囲気だけ楽しんだので御座いましょう。

書院の芝生と花壇との所に大きな甕が二つか三つ置いてありまして、炎暑の日差しで温まった日なた水で水浴びしている姿――〈恰幅のよろしい少し毛むくじゃらの蘆花〉を覚えております。叔母が、甕の周りの植木に筵を下げ、着物を脱いでは、「甕の行水はいい感じ。サッパリすること…」などと和んでおりましたから、アダムとイブとか云っていた頃には、そんなことが日常茶飯事だったんですノ。

蘆花は、好きな夏の風情を、「わけもなく嬉しかりけり陽は午なる真夏の園の花のいろいろ」と云う歌に詠んでおります。庭には、ダリアやとか向日葵とかがいっぱい咲いておりました。

ハンモックを吊って昼寝をして、目が覚めたら西瓜を食べました。たいていは、近くのお百姓さんから分けてもらったのを食べていたようです。家で作ったのは中が白くて食べられません。それを区切って帆かけ船を彫り、その中にロウソクの灯をともして、何だか薄気味悪いものを作って、私のオモチャにしてくれました。

夜になると、下の田圃へ「蛍狩り」に下りて行きました。滑る畔道をこわごわ歩きながら、団扇でハタキながら蛍を捕まえました。田圃では喧しいほどの蛙の大合唱ですが、私たち近づくとその鳴声が一斉にサット止むのが、幼心に不思議でしたネ。（註・『みみずのたはこと』一五五頁の「蛍」にその様子が詳述されている。）夏は楽しい思い出が多う御座いましたネ。

秋・冬の思い出

粕谷の秋は本当にさみしいものでしたネ。駅から真っすぐの道が続いておりますが両わきは低い土手になっておりまして、芒（すすき）が一杯生えて居りました。よそから帰って来ますと、西日が芒に当って、本当に銀の波を打っているようで御座いました。

その下には紫色の野菊が咲いておりました。こんな所におりますと、野の花などいちいち取ったりは致しませんが、あんまり美しかったので、車から下りて、いっぱい手折って持って帰った記憶も御座います。

蘆花は雪が好きで、雪の日はとても機嫌が良う御座いました。夜の間に雪が降って、朝、戸を開けますと陽が照って居ります。その様子を、「額縁なしの絵だ」と、書いておりますネ。昼間、一日中降っておりますと、物音ひとつ致しません。たまに、樫の木に積もった雪が屋根にドスーンと落ちる音がするぐらいで、普段は聞こえませんのに、目黒あたりの工場の汽笛が聞こえてくるぐらいで、あまり淋しいので、そんな日には、叔母

にお琴をひかせたり、自分で廊下にありますオルガンで、六段など指先で弾いておりました。

母屋の裏に「柚子」の木がありました。雪が積もっているのを竿で落として、上を蓋にするように切って中をえぐり、それに味噌を詰めて焼きますと、いい香りがして、蘆花はそれがとても好物でした。その柚子味噌を食べながら、「鶴子も大人になったら、この位の親孝行をしてくれるだろうネ」と云ったその言葉だけは、不思議に思い出として残っておりますノ。

よく、読者の方々や社会一般では、この『みみずのたはこと』や、自伝小説『富士』、あるいは自伝的な『思出の記』などの内容が、事実として受け取られ、理解されているようですが、作品世界と現実とは、いちじるしく異なっておりますの。

これは、非常に大事なことなのではっきり申し上げますが、『みみず』も紀行文「死の陰に」も、私の経験したこと、私の記憶とは大分違っております。貴方や読者の皆さんは、あの通り、あるいは、あれが事実とお思いかもしれませんが、実際とは非常に相違していることを明確にお伝えしたいんです。特に、『みみず』は、小説とは違って、生活記録あるいは随筆風な文章なので、ついついあれが恒春園での生活そのものと思われるんです。人は誰でも「美しい誤解」に酔うのは、よい心地で御座いますからね。

子ども好きだった蘆花

前にもお話申し上げたように、叔父は大変子ども好きでした。無いものねだりだったんでしょうか…。青山の私の兄弟たちは粕谷に行くのがそれはそれは楽しみで、

「健次郎サンのところに、何時行くノ」

「早く粕谷に行きたいナ」
「今度は何のお話かしら」
などと、指折り数えて楽しみにしておりました。
叔父は叔父で、青山が来るとなると、二三日前からソワソワして、歓待の準備をいろいろと頭にえがき、愛子叔母や女中たちに何くれと差配しておりました。当日になると、夏はトウモロコシ、秋はサツマ芋を茄でたり蒸かしたり、せいろの蓋をとっては、箸をさつまに突き刺して、蒸かし具合を確かめたりと、気もそぞろの様子でした。
青山の兄弟たちが楽しみにしているのは、夏の水蜜でも西瓜でも、秋の栗でも柿でもなく、叔父が語る西洋の名作童話だったんです。あの頃は、今日と違って童話や児童図書などが少なう御座いましたから、叔父から聞く童話がとても楽しみでした。グリムやペローの物語は、本で読むより叔父から聞いたのがほとんどですの。
特にペローの『長靴を履いた猫』とか、『眠れる森の美女』とかは、今でも記憶に残っておりますの。それにも増して面白かったのは、ヴィクトル・ユーゴの『レ・ミゼラブル』でしたね。身振り手振りの大熱演に陶然として酔い痴れ、カタルシスにつつまれました。そう、今日風に云えば「一人芝居」とでも申しましょうか。
こうした甥・姪の歓待に対して叔母の機嫌が次第次第に悪くなるんです。叔父は他の事は目もくれず青山に付きっきりですから、無理も無いですよネ。叔母が苛立ち、ブツブツ嫌味を云いはじめ、やがて甥・姪たちに当たりはじめます。『みみず』の中に「青山から来た子ども達がホームシックにかかり目黒の火力発電所の煙突の煙を見ては涙ぐんでいる」と書いてありますが、あれは真っ赤な嘘、私達は叔母にいびられて涙ぐんでいたんですの。

粕谷での話ではないんですが、こんな事があったんです。例の「死の蔭に」の旅が終わった最後の日（大正二年一一月三〇日）、出雲で買った「瑠璃」の細工物を、此所の兄・蘇峰の家に寄らず、この前を通って隣の姪にわざわざ届けたんですの。本当に子ども好きだったんですネ。（註・この当時、蘇峰の屋敷に隣接した地続きに、三宅驥一（きいち）氏に嫁いだ長姉・逸子さんの屋敷があり、その姪に届けたもの。）

夕焼け空を眺めては、一人で涙ぐむ私

姉や弟など、兄弟たちが青山から遊びに来るとキャキャと、夢中になって遊び廻りました。一日たち二日たって、いよいよ青山に帰る時になると、今までの楽しさが潮が引くようにスーッと遠ざかり、姉や弟が墓地の横を手を振りながら坂道を下り、次第に人影が小さくなっていくと、今までのカラー写真の風景が、墨絵のよう淡くかすんでまいります。

やがて、西の空が夕焼けの茜（あかね）色に染まって来ると何となく淋しくなり、地平線に夕日が沈み始めると、思わず、悲しくなって涙ぐむことが、しばしばありました。

いくら叔父・蘆花が可愛がってくれても、大きくなるにつれて、次第に親・兄弟と別れて暮らす淋しさを感ずるようになり、時々、得も云われぬ寂蓼感に襲われることがありました。『みみず』には、叔父が、「鶴子、鶴子」と、掌中の珠のように可愛がった様子が描かれておりますが、叔父が思い入れた作品の中の私と、実在の私の気持ちとは、かなりの乖離がございますノ。

粕谷時代は、一人っ子だったために犬のシロやピンを相手に話す以外は、何時も「独り言」を話していました。そのせいか、この歳になっても独り言を云う癖がついて、なかなか治りませんね。

（渡辺：岩波書店から出された『徳冨蘆花・検討と追想』中の三井常太郎の回想に、
「恒春園を訪れて、「今日は……」と問うと、
「三井の兄さんよ」と奥へ知らせるのも鶴子さんであった。
鶴子さんの乳母車にはいつも犬が入っていた…」
とありますが、鶴子さんに、この文章を読み上げて三井さんのことをお聞きした。）
三井さんは、緑々会で一度だけお会いしたことがありますが、その他のことは、全く覚えがありませんノ。御免なさいまし。

子育てごっこの終わり

大正三年五月二十一日、粕谷における五年八ケ月の生活を終わり、私は青山に帰ってまいりました。
私の祖父・徳富一敬は、徳富一族の血筋のせいか息災でおりましたが、やはり寄る年波には克てず、九十を過ぎてからは「東郷病」で悩んでおりました。私は経験が御座いませんが、なんですか、すごい激痛が奔（はし）るんだそうですネ。大正三年、九十三歳になってからは、日に日に衰弱してまいりました。
親孝行の父・蘇峰は、祖父を逗子から青山に移し、日夜看病に明け暮れ、主治医の先生から危篤を告げられる度に、臨終に間に合うよう二度も三度も粕谷に迎えをよこしました。
それでも腰を上げない叔父に対して、姉兄弟や親族などが説得に訪れましたが、頑（かたく）なに拒否し続けました。
その日、「父・一敬、生命危篤」と云う父・蘇峰の書状を持って、書生の松岡が二人引きの人力俥で粕谷に叔父を迎えにまいりました。それでも叔父は頑として動かず、結局、この最後の使いに、私を俥にのせて、

「迎えが来るまで帰っちゃいけない」と申して、帰してしまったので御座います。
子ども心にも、何が何だか不可解のうちに、この青山に戻されました。それで、（蘆花とは）親子の縁と申しましても、籍に入っていたわけではなく、法律上の親子関係は御座いませんでしたが、蘆花は、「百姓ごっこ」をして、「親子ごっこ」をして、「夫婦仲良しごっこ」をして…とどのつまり、これで、「親子ごっこ」も終わってしまったわけでございますノ。
この「子育てごっこ」の親子劇場は、フィナーレにならないうちに、急速に緞帳が降りたと云う感じなんでしょうか……。
私を青山に返したその日、夕方、私の布団から着物、筆や半紙の勉強道具はもちろん人形や玩具の一切を、庭に放り出し山のように積み上げ、火を点けて燃やしたことを、人伝に聞きました。
粕谷の人たちは、「粕谷御殿が大火事だ！」と叫び、鍬（くわ）を捨て鎌を放り出しホースを担いで、消火に駆け付けたんです。蘆花の気持ちとしては、「このさい、（兄と同様に）鶴子との関係を断ち切りたい」「淋しさから逃れたい」「モノがあれば、鶴子を思い出すので一切、消し去ってしまいたい」と云うことではなかったのでしょうか。
私は小学校の二年の一学期まで義務教育を受けていないので御座います。学齢に達しまして、叔父と叔母がどういうわけで入れなかったのか。
―ただ、こんなことを申しましたノ。「ここいら辺は、関東のベエベエー言葉だから、言葉は青山の姉さん達のような言葉を使わなけりゃいけない。」
何か少し貴族趣味で、どうかと思うんですけれど……。

その頃、「寄生木」の主人公・小笠原善平さんの妹の琴子さんに、読み書きを教えてもらっておりましたノ。私が実家に帰されましてから青山（蘇峰）と、千歳（蘆花の家は千歳とか粕谷と云われていた）の間は、十数年間断絶しておりました。

それに、粕谷では野育ちで御座いましたので、実家へ帰されましてから、親や兄弟から、「田舎ッペ」「田舎ッペ」と盛んに云れました。馬鹿にされ、嘲笑されたその言葉が悲しいやら悔しいやらで、子ども心にひどく傷つきました。したがって、粕谷の思い出を忘れよう忘れようと努めました。

父からは「雅猿（がえん）」と云う渾名（あだな）を付けられました。「雅」と云うのは、優雅の雅ですから、「お淑やかとか、奥床しいと云うんですか」と父に聞きますと、

「動物園の猿じゃなくて、もっと山奥にいる一番暴れん坊の猿のことサ」

と云われ、期待に反した答えが返ってきたので淋しい思いが致しました。

それで、子どもなりに、早く都会の子どものようになりたいと思いまして、努めて千歳のことを忘れようと致しましたので、なおさら記憶が少ないのではないかと思います。

今、振り返ってみても、青山に帰ってから粕谷のことを時々思い出しましたが、「楽しい思い出」は、全然ありませんでしたネ。

以前にも、お話申しあげましたように、青山に戻って来てから、「青南小学校」に編入学たしました。何しろ学校へ通ってなかったものですから、一学期の成績は、お習字だけは「甲」、後は全部「乙」、しかし二学期からはボツボツ「甲」が頂けるようになりました。五・六年は、「青山師範の付属小学校」、女学校からは、「女子学習院」に進みました。

青山に帰ってから、蘆花のこと粕谷のこと、あるいは、それにまわる事柄については、その後まったく話題には出ませんでした。意図的に話さなかったと云うより、父はもちろん母も家事・育児をはじめ、徳富家一切の取り仕切りで忙しく、そんな余裕は無かったのだと思います。

青山に帰ってから、姉たちと時々兄弟ケンカをしました。何しろ私は六女ですから、良きにつけ悪しきにつけ、上から順番に下りてくると、最後は私のところにやってくるのです。

父・蘇峰はそれを見て、「鶴子のケンカは、姉妹の諍(いさか)いのようではなく、まるで『夫婦ケンカ』のようだナ」と云われたのが、今でも強く印象に残っております。粕谷時代、毎日のように朝から晩まで、叔父・叔母の夫婦喧嘩を見て育ったんで、大人のやりとりのようだったんでしょうネ。

「お馨(けい)さん」の許婚その後

『みみずのたはこと』の中に「梅一輪」という佳作がございます。そこにお馨さんという人が出てきます。そのお馨さんのことは覚えておりませんのですが、その恋人の葛城(かつらぎ)と出ております方で、本名は鹿子木(かのこぎ)員信というお名前で、この方は徳富の親戚筋にあたります。もとは海軍の士官だったのですけれど、日露戦争を境に学者を目指して退役し、アメリカに留学されたそうでございます。

お馨さんとの恋愛をお馨さんの親類が反対したそうですが、蘆花夫妻が骨を折り送り出して、恋人の後を追ってアメリカに行き出した。一年足らずは大変幸福だったそうですけれども、お馨さんは急病で亡くなってしまいました。

鹿子木さんは、アメリカがいやになったのか、今度はドイツに留学致しました。あちらで、ロシアとドイツ

の混血の人だと聞いておりましたが、その人と結婚して日本に帰って来て、粕谷の茅屋を訪ねて来ることになったんです。

その時、叔父と叔母は茶目ヶ気を出しまして、二人で相談しているんですの。お馨さんを可愛がったあまり、その後に来た夫人をどうのこうのというような、そんな気持でやったのではないと思いますが、

「鹿子木君が外国の夫人を連れて来るから、最も食べにくいものを食べさせてやろうじゃないか」

と云って、うどんだか蕎麦だかを手打ちにいたしまして、

「フォークなんか出さないで食べさせよう」

などと云っておりました。

間もなくご夫婦が見えましたが、蘆花は馬鹿正直ですから、その通りに話したらしいんですね。そうしたら、鹿子木さんは別に驚きもせず、

「うちは貧乏学者の家ですから、日本の生活に一日も早く馴らすように、お米のご飯で塩鮭と漬物で食べています」

と云われてしまい、せっかくの目論みも水泡に帰してしまいましたの。いかにも蘆花らしい仕掛けですね。遠縁の鹿子木員信ですが、蘆花も愛子叔母も、二人とも好い感情をもっていなかったですね。外人を嫁にしたのが、気に入らなかったみたいでしたね。

老いて息災の日々

まだ梅雨が開けきっておりませんが、暑い日が続きますね。おまけに、七月だと云うのにもう台風が二度も

やって参りまして…。

貴方もご存じのように、私、つい先日の七月一二日の誕生日に九六歳を迎えました。

女子学習院の同級生三〇人のうち、存命なのは、もう一人の学友と私のたった二人だけになってしまいましたの。親兄弟はとっくに他界いたしましたが、最近では、甥や姪たちも年寄りになって旅立つようになり、親しい身内が欠けるのは、やっぱり淋しうご御座います。

でもお陰さまで医者にかかることもなく過ごしておりますが、近頃は耳ばかりでなく眼も弱わり、新聞も大きい活字しか読めなくなりましたの。（訪問当日、マンションのドアを開けると、今までと違ってテレビの音量が吠えるようにガンガン響いたので吃驚した。）

浅原健も亡くなりましたね。貴方もその葬儀に参列されたそうでご苦労さまでした。キリスト教のお葬式だったそうで…。この人（註・お世話をしている宇田ハル子さん）とお会場でご一緒だったとか。（宇田さんが、吉田正信先生が葬儀で弔辞を述べたこと、昨年の「蘆花忌」に引き続いて今年も記念講演をなさる予定であると鶴子さんに話す。）浅原も多くに方々に見送られて天国への旅立ち、よかったですこと。

去年の暮れだったか、尾間明の孫を連れて、ここに見えました。尾間明は私の従兄の夫ですの（註・鶴子さんの伯母・静子の娘・琴子の夫）。蘆花会のことについての話でしたが、それから間もなくでしたね。

ところで、『みみずのたはこと』の会、現在（いま）でもなさっていらっしゃるんですか。

（『みみずのたはこと』上下二巻が終わったので、この六月からは『自然と人生』の講読に入ったむねを述べると、）

中野好夫先生も「蘆花の作品と云えば、とどのつまり、『みみずのたはこと』と『自然と人生』の二冊であ

る」と、仰有っていますが、私まったく同感、その通りだと思います。『自然と人生』をおやりになるのは、大変、結構で御座いますこと。

「死の蔭に」の旅

前回、大正三年五月二十一日、粕谷における五年八ケ月の生活を終わり、私は青山に帰ってまいりましたと述べました。したがって、このシリーズの続きは、当然青山以降の回顧談になるのが、然るべき順当さで御座いますが、あえて、このたび時の流れの零（すい）（水脈）に淀みを作らせて頂きたく存じます。それは、作品にもなっております「死の蔭の旅」の紀行で御座います。

（渡辺注：豪雨の旅立ち、大正二年九月二日の朝、篠突くばかりの大雨であった。

蘆花四六歳、妻・愛子四〇歳、養女・鶴子七歳、『寄生木』の小笠原善平の妹・琴子二一歳、この奇妙な組合せによる同行四人は、この朝、かっきり九〇日の長旅に出発した。）

一家をあげての大旅行にもかかわらず最初から、ほとんど予定というものがはっきりわかっていなかった。ただ、強いて目的らしいことと云えば九月二四日、鹿児島での西郷隆盛の三七回忌だけだった。

この旅行は、当初、九月一日の出発を目論んでいた。それが二日にずれ込んだのは二つの理由からである。第一は三一日に義兄・大久保真次郎夫妻が、アメリカから帰朝した娘の久布白落実とともに来訪したため、無碍（むげ）にも断れず、一日は義兄夫婦デーとなったこと。第二は、旅行の留守居をする琴子の姉・俊子が三一日までに来なかったので、そのため止むを得ず一日遅延しての豪雨の中での出発となったのである。）

大正二年、叔父夫婦が当時の朝鮮・南満州・山陰・京阪・九州と、腰巾着の私にお琴さん（二十歳の琴子は

日本橋の女学校が始まるので途中帰国〉を同伴した三ヵ月もの長旅で、この旅行記は「死の蔭に」と題して、私が実家に戻ってからの大正六年に発表されました。

粕谷には五年六ヵ月おりましたが、なにしろ幼い頃のことなので、ほとんど記憶が残っておりませんが、この長旅は七歳だったこともあって、かなり鮮やかに思い出の鏡に映っております。どうぞ、ご期待くださいますよう…。

「死の蔭に」の旅は大正二年の九月から十一月までの三ヵ月で御座いますが、出版されたのは、四年後の大正六年三月十五日で、作品は蘆花全集第十一巻に載っております。

この年は私が小学校五年だったので、出版についても、よく覚えております。

最初にお断わりいたしますが、「この作品は事実の報告ではない」ということで御座います。実際の体験・経験の他に挿入・加筆・虚構・省略などがあり、まったく事実そのものでは御座いませんの。

と、申しますのは、私の記憶、理解したこととは異なる部分が非常に多う御座います。これは、『みみずのたはこと』もまったく同じで私の覚えていることとは分隔たっております。ただ、私の記憶と云っても、九十年も前のことなので、ごく部分的にしか記憶を辿ることしか出来ませんの。それは、誰でも九十年前の七歳の子ども時代を思い出せばおわかりで御座いましょ。

後ほど詳しくいろいろお話申し上げますが、子ども心にもこの旅行は、何とも暗い憂欝な旅でしたが、ですからこの題名をつけたのかどうかわかりません。ただ、中野好夫先生が仰有るには、〈「死の蔭に」との題名は、聖書、とりわけ旧約にしばしば出る「死の蔭の地」「死の蔭の谷」等々の隠喩（いんゆ）によるものであることは、ほぼ確実あろう〉とのことで、私、よく判りませんが先生の卓見通りではないでしょうか。その一方で先生は、

〈「暗い死の影が漂うような」ものではない。光があり希望がある旅であった〉とか……述べておいでで御座います。三ヵ月間同行した私としては、中野先生の解釈とは全く違います。

出発前から長いことずっと苛々（いらいら）し、不機嫌な暗い憂鬱な旅でした。自殺でもするような旅で、今思い出してもイヤーな感じの灰色の旅でしたね。

叔父・蘆花と愛子叔母は、粕谷での生活と同じように、旅の間、毎日毎日ケンカけんかばかりしていました。喧嘩に明け暮れる旅でしたね。…一方、叔父は旅の途中でも旅館に着いても、時間さえあれば、せっせせっせと絶えず文章を書いておりました。したがって、景色を眺望するとか、風物を愛でるとかという様子はありませんでしたね。「喧嘩」か「机に向かう」かのいずれかでした。思えば不思議な旅でしたね。

旅順では、激戦地で有名な「二百三高地」に行きました。途中、山肌に白いものがあるとそれを見た叔父が「白いのは骨だ」「兵隊の骨だ」と叫び、前に進みません。赤いものが見えると、今度は「兵隊の血だ。赤い血だ」と叫んで立ち止り、結局、私達だけで登り、蘆花叔父は峠の茶屋に留まったまま、とうとう二百三高地には登りませんでした。神経質というか、神経が細かすぎる人だったのですね。

十月半ば朝鮮に入ると、日一日、刻一刻、ますます機嫌が悪くなり、同行の私達も心が晴れませんでした。それは当時、父・蘇峰が朝鮮で羽ばたいていたからで御座います。不機嫌が強くなり、まったく恐ろしいくらいの毎日でした。

この旅行は、大正二年九月二日から一一月三〇日まで、満三ヵ月の大名旅行でした。正味、九〇日間の旅は、叔父・蘆花にとって、二度の世界周遊をのぞいて国内での旅行では、最も長い旅でしたね。文筆業という職業にもよりますが、何もかも擲（なげう）ってまる三ヵ月もの間、確たる目的もなく家を空けられるのは、長男と違って、

叔父が次男だったからなんですの。長男と違って、次男はやっぱり呑気な存在で御座いますね。

安重根直筆の掛け軸

貧而無諂富而無驕

庚戌三月 於旅順獄中 大韓国人　安重根 書

安重根と云っても今の若い方はお分かりにならない事と思いますが、日本では明治の元勲・伊藤博文を暗殺した犯人。しかし、韓国では民族の英雄ですね。その安重根直筆の書を旅順小学校の菱田正基氏から贈られたそうですが、その件やその前後のいきさつ、安重根のことについてはよく分かりません。ただ、この書は頂いたものではなくお借りしたのが、そのままになっているみたいですね。

関寛斎・斗南入植百周年記念祭

去る一〇月一四・一五日、北海道で行なわれた「関寛斎」さんの催しに御出でになられたそうで……はるばる陸別までは遠う御座いますからネ、それはそれはご苦労さまですこと。

こうやって、叔父・蘆花は、いつまでも皆さんに大切にされ、ほんとうに幸せ(しあわ)ですネ。渡辺さんたちも、いまだに蘆花のためにいろいろお力を尽くしてくださり有り難いことです。

父・蘇峰も、「健次郎サンは得な性分で幸せな人だ」と始終申しておりました。皆さんに良くしていただいて叔父・蘆花は果報者です。さぞお疲れだったことで御座いましょう…。これが大会の資料ですか！ずいぶん分厚く立派なプログラムですこと。お作りになられた方は大変でしたね。

参加者名簿を拝見すると、マア、大阪市、愛知県刈谷市、千葉県の東金、銚子…それに徳島県、そうで御座いますネ、寛斎さんは徳島県に居らして、それから北海道に渡られたんですから、徳島ねえ。会を重ねるたびに盛大になられて、お宜しう御座いますこと。

これが蘆花の文学碑ですか。この碑文は蘆花の『みみずのたはこと』の一節が刻まれているんですか、そうでしたネ。『みみず』には、確かに北海道に伺った時の文章が出ておりましたね。

この落成・除幕の時にも、私に何か一文を寄せて欲しいと、ご依頼が御座いましたが、「とんでも御座いません」とお断わり致しましたの。私ごときが記念碑に文章を寄稿するなんぞは、厚顔のかぎりで御座いましょ。この写真で見ても立派な文学碑ですネ。こうして陸別の方々にいつまでも丁重に遇していただいて本当に有り難いことで御座います。蘆花と寛斎さんとは、きっと心が強く通じ合ったんでしょうネ。

寛斎さんは、明治四一年四月二日に突然粕谷に尋ねて来られてから、四五年に亡くなるまで八回、恒春園を訪問されたそうですが、粕谷での私の記憶にあるのは、一回だけですネ。若い頃は上背が立派だったそうですがその頃は、もう体つきが小さく、ガリガリにやせておりました。髪の毛を丁髷（ちょんまげ）のように上に結び、痩身でしたが、サッサとお歩きになって、木戸から中庭を通って、書院の方に真っすぐにお行（い）でになったのを今でもはっきり覚えておりますノ。

〔明治〕四五年に薬を飲んで亡くなった、そう、モルヒネですか、服毒をねえ……。蘆花に関係する方々は、皆さんこういう死に方をなさったんです。不思議ですね。

息子さんの関又一さんと云う方は全然存じません。静吉さんはよく存じておりますが、この方はお孫さんなのですか、そうなんですか。静吉さんは奥様とご一緒でここにも四・五回お見えになりました。奥様のお足が

お悪かったことを覚えておりますの。

何時ぞや婦人会の方々でしょうか、何人かでおいでになり、その時スズランの花を沢山頂戴いたしました。「蘆花忌」でも、ご一緒したことがご座居ました。お手紙などを頂いておりましたが、最近は、お年賀状のやり取りも無くなりましたが、現在九四歳でお元気の御様子とか、そうで御座いますか。

（陸別の関寛斎資料館所蔵の写真の複写を見て）これは、陸別の資料館の写真を貴方がお撮とりになったのですか。明治三〇年一一月四日、札幌農学校予科卒業記念とありますね。ああ、後列左から四人目が寛斎さんの息子さんの又一という方、なるほど、寛斎さんに似て背丈が立派で、前列の四人目が有島武郎ですか。二人は同級生なんですね。詰め襟の学生服姿で、少年みたいなあどけなさが残っておりますこと。たいそう裕福なご家庭の坊っちゃんでしたが、関寛斎さんと同じように、ご自分の土地（農場）を小作人に与えてましてネ。

有島武郎は「白樺派」で御座いましょ。白樺派は武者小路実篤や志賀直哉など、いろいろの人たちが恒春園によく尋ねて見えましたね。蘆花は白樺派から憧憬されていたんです。しきりに蘆花との接触を得たかったようですが、蘆花の方が気乗りしなかったみたいですよ。

昨日、陸別から馬鈴薯が届きました。遠い北海道からわざわざお送りいただき恐縮致しております。男爵とメークインと二種類の詰め合せで、楽しみで御座います。

私、ジャガイモでは、男爵よりメークインの方がずっと好きで御座います。もちろん男爵も蒸かしていただくと美味う御座いますが、食感も味もメークインが好みですの。この薯は川田男爵が、アメリカから輸入して栽培を奨励したことから「男爵」と名付けられたんですが、私、川田男爵のお嬢さんと女子学習院で同級生だったんです。卒業後、修道院に入り尼さんになられましたが、その後どうなさっておられることやら……。

望月百合子のこと

望月百合子は、蘆花存命中は、一度も粕谷に来ませんでした。それはパパ〔石川三四郎〕が、「蘆花は女癖が悪いから、一人で行ってはいけない」と、出入り差し止めを言い渡されていたからだと、私に云っておりました。

蘆花没後は、頻繁に恒春園に見えておりましたね。若い時はかわいい人でした。さっぱりした、気持ちのいい人でしたね。ですから、愛子叔母と合わなかったのかもしれませんね。どう云うわけか、私とは仲が良く、この家（マンション）にもよく見えました。

ある時長谷川時雨（しぐれ）の「輝く会」主宰で、望月百合子・愛子叔母・私・私の姉の四人一緒で信州の旅行に行ったときのこと、百合子と叔母が大喧嘩をしたんです。そりゃ、もの凄い大喧嘩でしたが、その原因が、叔母が彼女に、「―あなたは、私の御伴なんだから―」と云ったその「御伴」云々が気に入らなかったことが、喧嘩の発端だったのです。望月百合子にすれば、フランス帰りの自我の強い女性に向かって、封建的な主従関係のような「御伴」という言葉にカチンときたんですね。そりゃ迫力があって、凄まじかったですよ。

危篤の連絡のこと

蘆花の死の前日、昭和二年九月一七日に伊香保から兄に「お目にかかりたし。御出で乞う」という電報を打ったのは、愛子夫人であると云われ通説になっていますが、それは間違いで、本当は姪の河田（福田）静子（蘆花の姉河田光子の娘）です。蘆花の病状が悪化した頃から、河田母娘は、粕谷に看病・手伝いに来ており、伊香保にも同道しました。当日、蘆花とのやり取りで、蘇峰と会いたいのではないかと推察し、以心伝心で、

静子さんが、

「青山の叔父さんとお会いになりませんか」と尋ねると、

蘆花が「うん」と頷いたので、仁泉亭の帳場から急ぎ、東京の蘇峰に電報を打ったのです。それが何時の間にか愛子夫人がしたことになってしまいました。（以上）

〔インタビューを終えて〕

兄弟確執のはざま ―「子育てゴッコ」に翻弄された鶴子―

渡辺　勲

知の巨人・徳富蘇峰への渇仰と、明治の文豪・徳富蘆花に対する耽読と桎梏との関係は、少年時代に溯る。

私の父は私が九歳のとき他界した。たった一晩の病臥で病名は急性肺炎。

若いときから蘇峰の著作にふれていた父は蘇峰が「近世日本国民史」を東京日々新聞（現・毎日新聞）に連載を始めると、それまでの朝日新聞から東京日々に講読替えしたほど蘇峰を畏敬していた。

その父が生前、私たち三人の兄弟に、

「蘇峰と蘆花は兄弟仲が悪くてナ、お前たち間違っても、ああなるなヨ」と語り、その言葉は七十年後の今でも、静寂な夜半、ふとトレモロのように耳朶に響いてくる。

十一歳、小学六年の秋、近所の古本屋から岩波文庫の『みみずのたはこと』を購入し読過したところ、長閑な田園を描いたポエジーに、酔い痴れるような恍惚と、顔面が高揚する興奮を感得。

昭和二十年、Ｂ２９の焼夷弾の直撃で頭部裂傷、全治一ヶ月の火傷、戦中戦後の混沌で心身ともに苛まされ、その後、詩人・吉田一穂の門を叩き、内村直也・田中千禾夫に劇作を学んだが、漂泊の文学青年だった私が逡巡、懐疑、苦悩、挫折、漂泊の果てに辿りつく先は、とどのつまり結局は、文学と人生の門口である自然文学

の「蘆花」であり、詩情豊かな「みみずのたはこと」だったのである。

名著「蘆花徳冨健次郎」の著者・中野好夫氏が、「数ある蘆花の作品のなかで、最後に残るのは『自然と人生』と『みみずのたはこと』の二篇である」と語っているように、『みみずのたはこと』は、蘆花にとっても文学史上においても、希有の名作と云える。

この作品は、蘆花のヒューマニズム、農への憧れと自然への共生と回帰、田園からの誘いと共鳴、四季の移ろいに彩られるくらし、村人へのいつくしみなどが、優しい眼差しと柔らかい筆致で色彩ゆたかに描かれている。それ故に、その文章にふれると、心が洗われ気持ちが安らぎ、情緒が安定し、読みすすむうちにうっとりとなり、読了するとカタルシスで陶然とする。

明治四十年、東京市内、高樹町から東京府下、千歳村粕谷に移り住んだ蘆花が最初に驚いたのは、二十六軒の農家のいずれもが子沢山だったことである。当時、粕谷の村民は、実子の外、貰い子拾い子がおり、蘆花の表現によれば、

「どの家にも子どもがうじゃうじゃ」いた。

文豪蘆花は、狷介、偏屈、意固地、短気、我執がつよく苦悩、挫折、錯誤、失策などが多い作家だったが、それ以上に彼の人生最大のアキレス腱は、「子無き」人生であった。蘆花の母・久子は九人兄弟、蘆花は八人兄弟・兄・蘇峰は十人の子福者などの血統にもかかわらず、恵まれぬ生涯であった。

「無いものねだり」とは別に、蘆花は非常に子ども好きだった。

二十六軒の村人には、無視、怒号、偏屈などによって疎遠であったが、村の子どもたちには、一度たりとも渋面を見せたことはなくいつも相好をくずして縁側に招き入れ、講釈師よろしく身振り手振りで、イソップやグリム、ペローの童話を語って聞かせたのである。こうしたことから、子ども欲しさの一念が昂じ、「ぜひ子育てを」の願望が益々ふくらみ、その結果、思いあまって蘇峰の六女・鶴子さんを養女に貰いうけたのである。

明治四十一年、まだ物心もさだかでない二歳の鶴子さんを家族にむかえた蘆花は、それはもう夢中で、「鶴子、鶴子」と、掌中の珠のようにいとおしく慈しみ育てた様子は『みみずのたはこと』の文中の随所に、微笑ましくさわやかに描かれている。

私は、小学六年以来『みみずのたはこと』を何十回となく体読しているが、文中の鶴子について、少年時代は妹のように、思春期の頃は恋人のごとく、最近では娘のような感情を抱く作中人物なのである。

それは、あたかも博多人形のようであり、目鼻だちもしぐさも素直で愛らしく、横顔や着物の柄は、岸田劉生の「麗子」を彷彿させ、読むたびごとにイメージが膨らむのである。

平成十一年、前述したように少年時代からのわたしの二つの課題、「兄弟の確執」と『みみずのたはこと』について、友人の出版社長からの勧めで、『恒春園離騒』を刊行した。

拙著を謹呈するため、財団法人「蘇峰会」に伺ったところ、事務局長・岩崎達郎氏がページをめくりながら、

「蘆花の養女だった鶴子さん、今でもご健在ですよ」と云われ、

「え、あの博多人形のような鶴子さんが！」

と仰天し絶句した。

あどけない童女の鶴子さんが……みみずの看板娘の鶴子さんが……。
みみずの時代、明治四十年からは百年の星霜。齢はとっくに百歳をこえているはずなのに、仰天の驚き。
夢まぼろしの鶴子さんが、息災でいらっしゃると聞いたわたしの心情は、まさに「青天の霹靂」である。
早速、拙著持参で、お住まいの青山のマンションに参上した。
明治三十九年生まれの鶴子さまは、平成十一年のその日は九十三歳。
たしかにお年は召しておられるが、「養女・鶴子」がそのまま。温和で教養豊か、理知的でありながら情愛に満ちた端正なたたずまいなど、父・蘇峰そっくりな風貌からも、その人柄が感得される。
九十年前の『みみずのたはこと』が、今まさに眼前にひろがっている。奇跡の現実とでも云うべきか、これほどの読者冥利が他にあるであろうか。
旬日後、再度伺うと、開口いちばん、
「貴方の著作、拝見いたしました。
たいへん良く書けておりますが、残念ながら重大な誤りが三つ御座います。
まず第一は『蘇峰が経営の才たけている』とありますが、経営の才があれば、国民新聞があのような結果には至りませんでした。
静岡新聞の大石光之助のほうがずっと長じております。大石光之助がおりましたら、あの顛末は回避できたと思います。
第二は、貴方は、『愛子夫人は良妻賢母である』と書いておりますが、愛子叔母は、良妻でも賢母でも何でもありません。私の記憶では、毎日毎日、朝から晩まで喧嘩、夫婦喧嘩の明け暮れでしたネ。

第三は、死去の前日、伊香保の千明・仁泉亭から、『アイタシ、シキュウ、オイデコフ』と電報を打ったのは愛子叔母と述べておられますが、あれは看病に付き添っていた姪の静子（福田）です。叔母ではありません」

と、具体的に指摘され、汗顔の至り、冷水三斗の思いであった。

しからば、文中の過誤と筆禍のため、また今後の蘆花研究のため、

「叔父・蘆花について、私の知り得たことがらと経験についてお話申しあげましょう」と仰有り、こうして「青山通い、鶴子聞き書き」が始まった。

非才ながら、蘆花研究に励みつつあるわたしにとっては、天から降ってわいたような仰天で欣喜雀躍。それ以来、月に一回ほどの進捗で、毎回それぞれ話題の主題（テーマ）をきめ、

一月は、蘆花の子育て願望について

二月は、養女として粕谷に貰われて来るまで

三月は、『みみずのたはこと』成立のあれこれについて

四月は、〝関寛斎〟と、北海道・陸別訪問について

などのように進め、結局、通算二十四回もの聞き書きをおこなった。

この間、終始、平常にして端正、言語明晰でよどみがなく、唯の一度もメモや資料を用意することなく徒手空拳、記憶力も抜群で、氏名年数の間違いも一度たりともなく、文字どおりの生き字引には、ただただ舌を巻くばかりで敬服、脱帽。

歴史は資料によって成り立つように、文学も、作品の評価や作家の人物論については、価値ある資料によって成立する。

資料としての「聞き書き」は、漱石夫人の

「漱石の思い出」　夏目鏡子・述　松岡譲・録

が有名だが、今回の鶴子さまの「聞き書き」も、文学史的に貴重な資料であることは論をまたない。

鶴子さまの語られた内容には、数字をあげて具体的に詳細に語られたもの、個人の私的な内容、社会的な犯罪や不義不正で個人名を挙げられたことなども多々述べられたが、現時点では差し障りが生じるので、活字化を控えたものがかなりある。

縷々述べたように、わたしは『みみずのたはこと』の一介の愛読者にすぎず、鶴子さまは作中の登場人物であるにもかかわらず、初対面のわたしを厭わず忌みせず、旧知のように接し遇されたのは奇遇であろう。

当初、わたしは何ゆえにそれほどまで親切にしてくださるのかと、訝しげの気持ちだったのだが、鶴子さまが、

「今まで何人、何十人もの方が叔父・蘆花について語り論じてきましたが、その誰も彼もが蘆花は善人で蘇峰は悪人と云う立場で述べてきました。いわゆる兄弟喧嘩の確執も兄蘇峰が原因で、蘆花は全くの被害者で、実に気の毒千万である、と云うものでした。

それが、私が生まれて初めてと言ってもいいでしょう。今回、あなたが始めて客観的に父と叔父との両者の関係を書かれたので、重く垂れこめた靄が晴れたように感じました」

と、沁々と仰有ったので、その心情をかい間見る思いがした。

このように鶴子さまの言を待つまでもなく、蘇峰と蘆花の関係は善人・悪人の構図が一般的である。しかし、わたしはかなり以前から、両者は争いではなく、一方の仕掛けであると思っていた。例えば国家間でも、一方が武力を行使しても他方が応じなければ「事変」、応じて矛を交えれば「戦争」になる。

生前、蘇峰は鶴子さまに、

「世間では、兄弟喧嘩、兄弟喧嘩と盛んに云っとるが、儂は健次郎さんと兄弟喧嘩をした覚えはないヨ」と、つぶやくようにポツリ仰有ったことが、今でも忘れられないと語っている。

この兄弟喧嘩を巷間、善人と悪人、弱者と強者、ヒューマニズムとナショナリズムと図式化してとらえ、人々は「判官贔屓」で蘆花に肩入れしており、それが蘆花没後も延々と平成の今日まで続いている。そのため、鶴子さまの心労は察して余りある。

養女・鶴子と蘆花の関係は、「看板娘の鶴子」とあるように、「鶴子、鶴子」と掌中の珠のように慈しみ、和やかで微笑ましく語られているので、わたしをはじめ読者諸兄は、幸せな余韻につつまれる。だが物語と現実とは大違い。

鶴子さまは、蘆花の理不尽な仕打ちを何としても許せず、一生、苛まされたのである。

「『子育てゴッコ』をしたいばっかりに、犬や猫のように貰ったり返したり……」

「書生の松岡が迎えに来た人力俥に、理由（わけ）もなく突如乗せられて、突き返され、この心の傷は一生、今でも癒えません」

と、肩をおとして残念そうに仰有る。

伊香保・千明仁泉亭で死の直前、見舞いに駆けつけた蘇峰一家を前にして、蘆花は鶴子さんに
「『悪かったな、鶴子にはすまなかったな』と三度謝ったので、許せなかった叔父・蘆花をやっと許す気持ちに傾きました」と仰有る。だが不信と憎しみは完全に氷解したわけではなく、理不尽な仕打ちに対する私憤の炎は、その後も消えぬままで一生を終え、旅立たれたようである。

鶴子さまの居宅へは、テーマを決めての訪問だが、毎回毎回、参上するやいなや、
「まあ、お聞きくださいまし。愛子叔母はネ、朝から晩まで叔父と喧嘩、喧嘩でネ」
「お話に入る前ですが、叔母・愛子は、良妻どころか、およそ家事と云うものをしたことが御座居ません。体が弱いと云って、いつもごろごろ寝ていましたネ」
「その前に、まあ、お聞きくださいまし。叔母は料理は全然駄目。カレーを作るとメリケン粉が白い塊のまま入っているんですノ。叔父の友人たちが、『蘆花は、よく我慢して奥さんの不味い料理を食ってるなあ』と、仰有るんですのヨ」と、愛子夫人の批判、いきどおりから始まるこの種の「まあ、お聞きくださいまし」の話を、わたしはどれくらい耳にしたであろうか。

話が前後するが、世間では、兄弟の確執は伊香保での劇的な対面で氷解したと理解している。愛読者も蘆花研究家も、おおむねその認識である。だが、それは今日でも解決されたとは言い難い様相である。

昭和二年九月、蘆花没後、草深い粕谷の淋しい茅屋に一人住まいの愛子夫人を慰めよう支えになろうと云う人々が枝折り戸をくぐって訪れた。なかでも足繁く訪れたのが、社会主義者の木下尚江と無政府主義者の石川三四郎。二人はいずれも反蘇峰の急先鋒で、蘆花生存中から昵懇の間柄であった。彼らは蘆花の命日ばかりで

なく、日頃から頻繁に蘆花邸に集い、愛子夫人六十六歳の年、この六人のさむらいの集いを「緑々会（六六会・ろくろくかい）」と称し、やがて「蘆花会」へと発展させた。

こうした蘆花会の初代会長が蘇峰蘆花の姻戚の姪の夫・浅原丈平で彼も反蘇峰の旗手。

蘇峰は生前、鶴子さまに、

「浅原は我が家の眷属なのに、なぜ反蘇峰なのか不思議だネ」と、洩らしたと云う。

「蘆花会は、反蘇峰の巣ですが、二代目会長の横山春一さんになってやわらぎました。しかし、横山さんが急逝して、丈平の息子の浅原健が会長になって、また旧に戻りました」と、仰有る。これは従来からの潮目で、蘆花をあがめたたえ、顕彰するためには、対立の虚像が必要であり、蘇峰が悪人として眼前に立ちはだかり、巨漢として対置せねば座りが悪く居心地を得られぬからである。

蘆花会の面々は、今でも〝我こそは正義の味方、月光仮面〟よろしく、蘆花を神輿に搭せて担ぎ、

「養女鶴子は短期間とはいえ、鶴子鶴子と慈しみ溺愛され、本当に幸せに過ごした」と認識し断言して憚らない。しかし、鶴子さま本人にとってはそれとは裏腹に、粕谷での暮しは一生のトラウマであり、それより何より鶴子さまは、紛れもなく蘇峰の息女なのである。